豊見城市史
だより

第 11 号

2012

豊見城市教育委員会　文化課

目　　次

はじめに／豊見城市の字の変遷（地図）　…… 1

南米調査について／日程及び用務経過　…… 2

１．ブラジル

１）ブラジル連邦共和国とサン・パウロ市／地図　…… 3

２）ブラジルへの第１回移民 －「笠戸丸移民」…… 4

サントス、日系移民ブラジル上陸記念碑/４　6月18日記念碑、移民博物館、移民列車/５

大嶺快清、キタンダオオミネ、金城フミ子/６　瀬長貞子、赤嶺新野栄、城間愛子/７

ブラジル沖縄県人会館、旧コーヒー取引所、豊見城市民会/８

３）豊見城からの笠戸丸移民24人 …… 9

４）笠戸丸移民 －大田向雪－ の系図 …… 13

５）カンポ・グランデ市について …… 15

ノロエステ鉄道、開拓先駆者慰霊碑/15　中央市場、サント・アントニオ墓地、歓迎会/16

外間ウト、金城文子、郷土民謡クラブ/17

６）証言

赤嶺尚由/18　大嶺快清/20　大嶺勉/23

７）ブラジルからトミグスクの皆さんへ …… 27

２．ボリビア

１）ボリビア多民族国／地図 …… 30

２）コロニア・オキナワ（オキナワ村）／移住地の地図 …… 31

コロニア・オキナワの入り口、リオ・グランデ川、オキナワ第一日ボ学校/32

豊見城市からの教科書、ゲートボール愛好会、ボリビア沖縄県人会館/33

みうら商店、オキナワボリビア歴史資料館/34

３）証言

仲村渠信子/35　比嘉次雄/37

３．ハワイ

ハワイ調査について／日程及び用務経過 …… 40

アメリカ合衆国ハワイ州地図 …… 41

１）ハワイへ移民／當山久三の銅像、栽培されていたサトウキビ …… 42

サトウキビ／コロア製糖工場跡、リフエ製糖工場跡、長嶺龜、コハラ製糖工場跡/43

プランテーション・ハウス、プウネネ製糖工場/44

パイナップル／パイン農場の跡、パイン工場の様子/44

コーヒー／長嶺亀助、ミツエ・タニヤマ/45
タロイモ／當間加那、當間加那一家のタロ畑/45
２）沖縄人コミュニティーのはじまり／具志保男、「四海兄弟の碑」 …… 46
トートーメー、亀甲墓、大城強司、ルース・ユキ・サコダ、建設中のお寺/47
ピホヌア会館/48
３）日系人部隊／ヘンリー・H・ヒガ、第100歩兵大隊記念館 …… 48
エディ・K・ヒガ、エディ・K・ヒガの墓碑/49
ウォレス・H・オーシロ、ウォレス・H・オーシロの墓碑/49
日系部隊特別慰霊プログラムのようす、トーマス・オーシロ/49
４）沖縄への救援運動 …… 50
當銘亀、マサコ・トメイ、保栄茂の豊年祭衣装、カネシロ・カメ/50
５）ハワイの沖縄県人会／オキナワン・フェスのオープニング、ボンダンス …… 51
ハワイ沖縄連合会/51
ヒロ沖縄県人会、マウイ沖縄県人会、カウアイ沖縄県人会/52
ナカソネ夫妻（ハワイ島コナ）/52
６）系図研究会／チョウスケ・キシャバ、ナンシー・トメイ …… 53
エイミー・エイコ・ツル、アール・ジツオ・ザーン、ナガミネ・フォト・スタジオ/53
７）豊見城村人会／豊見城村人会横断幕、TOMIGUSUKU・Ｔシャツ …… 54
長嶺徳光、生年祝い/54
バレーボール大会、ピクニック/55
８）高良同志会／カメツ、カメ・オーシロ一家 …… 55
９）証言
當間長喜/56　ルース・ユキ・サコダ/58

調査協力者・機関 …… 61
むすびに …… 62
参考文献、写真（提供者、引用） …… 63

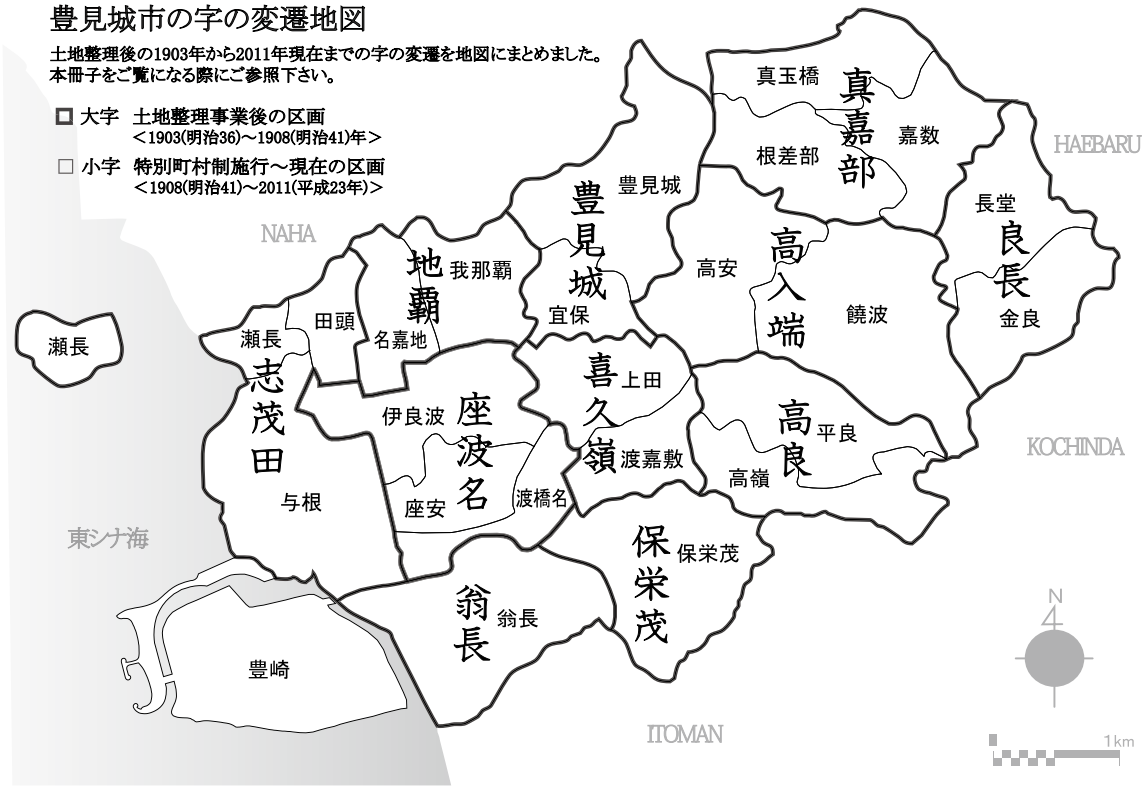
はじめに

豊見城市教育委員会文化課では2004（平成16）年度から『豊見城市史　移民編』の編集に取り組んできました。移民先の現地調査を2007（平成19）年度に八重山、2008（平成20）年度にブラジル、ボリビア、2010（平成22）年度にハワイを行い、また並行して豊見城市内、市外での移民関係者への調査も行ってきました。

現地調査での調査対象者の選出は、事前の市内調査での情報と現地での豊見城市（村）人会や沖縄県人会を通して豊見城市関係者を紹介してもらう方法をとりました。調査方法は聞き取り調査と関係機関からの資料収集を主とし、話者による証言、写真、文書類、手紙、新聞記事、雑誌、地図、文献、使っていた物などを提供、購入により収集しました。また移民にゆかりのある地に直接出向き、写真や動画の撮影も行いました。

現地調査で得られた内容は「移民現地調査報告展　わたしたちもトミグスクンチュ」を開催することにより、証言や資料を写真パネルで展示、一般公開しました。現地調査報告展は２度行い、１回目は2009（平成21）年９月１日～９月18日に八重山、ブラジル、ボリビアを、２回目は「第５回世界のウチナーンチュ大会」が行われた2011（平成23）年10月３日～13日にハワイも含めて開催、ともに会場は豊見城市役所１階ロビーで行いました（２回目はトミグスクンチュ歓迎会の会場内でも行う）。

『市史だより第11号』は「現地調査報告展　わたしたちもトミグスクンチュ」の内容を基本に証言や地図、写真を加え発行しました。



南米調査について

南米調査はブラジルとボリビアの２ヵ国を、2009（平成21）年８月31日～９月27日の期間、町田宗博（琉球大学教授）と赤嶺みゆき（編集事務局員）で行ないました。

ブラジルへは戦前・戦後を通して約393人、ボリビアへは戦後の琉球政府の計画移民として約44人の豊見城市出身者の渡航が確認されています。

ブラジルでの調査はサン・パウロ市とカンポ・グランデ市で１世～３世を調査対象とし、移民した時期や背景、移民地での戦争体験、戦後の日系社会、子どもの教育、沖縄県出身者同士の関わりについて聞き取り調査を行い、また関係資料の収集を行いました。

ボリビアではコロニア・オキナワにおいて、１世である２家族から聞き取り調査をすることができましたが、滞在中に暴動が起こり調査の中断を余儀なくされての帰国となりました。それでも多くの資料を得ることができました。

日程及び用務経過

ブラジル

８月31日～９月11日、18日、24日～25日　サン・パウロ市

調査人数　26人

調査した場所　セントロリベルダーデ地区、キタンダオオミネ（大嶺キヨ子青果店）、移民博物館、沖縄県人会、旧コーヒー取引所、サントス港、日系移民ブラジル上陸記念碑、SUBWAY（服飾店）、サータベルデ支部、BAMBUOTA（飲食店）、日伯文化協会、ブラジル日本移民史料館、サン・パウロ美術館、パウリスタ博物館、イピランガ公園

９月11日～９月17日　カンポ・グランデ市

調査人数　20人

調査した場所　カンポ・グランデ日伯文化体育協会会館、sbachopps（大田賀仁飲食店）、アルマンド総合運動場、開拓先駆者慰霊碑、カンポ･グランデ沖縄県人会、旧鉄道駅、セントラルフェーラ、安慶名氏経営の農園、日系立候補者の選挙運動視察、外間ハツ氏経営のバール（飲食店）、墓地

ボリビア

９月19日～９月23日　コロニア・オキナワ

調査人数　４人

調査した場所　リオグランデ川、比嘉次雄氏の農地、第一コロニア、第二コロニア、日本ボリビア協会、オキナワ日ボ学校、ボリビア沖縄県人会、セントロフェーラ

１．ブラジル

１）ブラジル連邦共和国とサン・パウロ市

日本の約23倍、世界でも第５位という広大な面積を持つブラジル連邦共和国。世界中の民族が集まり多様な文化が共生する国で、サッカーやサンバ、リオのカーニバル、コーヒーなどが有名です。使用言語はポルトガル語、人口は約１億9,400万人（2010年現在）で首都はブラジリアです。

海外で最大の日系社会が存在するブラジル国には、現在約150万人の日系人が生活しており、そのうち100万人は南米最大の近代都市ともいわれるサン・パウロ市に住んでいるといわれています。サン・パウロ市は標高約800メートルにある都市で、世界各国の企業ビルのほか、映画館、美術館、博物館などが立ち並ぶ、経済・文化の中心地です。市内には「リベルダージ（Liberdade＝自由）」という東洋人街（以前は日本人街）があり、その地区内では日系人が経営するお店を数多く見ることができます。

日本からの最初のブラジル移民が海を渡って100年目の2008年には、日本移民に関するイベントがブラジル国内各地で行われました。サン・パウロ市内で行われたカーニバルでは、ブラジル沖縄県人会から約600人が参加し、「日本移民100周年　守礼之邦・沖縄」をテーマに、首里城の守礼門や巨大シーサー、ミルク（弥勒）、エイサーや空手、三線、カチャーシーを披露し、多くの声援を浴びました。

また、多くのブラジル移民を輩出した沖縄県からもチャーター便を出すなど、多くの人が式典に参加し、ブラジル移民100周年を祝福しました。

ブラジル連邦共和国の地図

首都：ブラジリア

最大都市：サン・パウロ

■首　都　◎最大都市　●調査地

『具志川市史第四巻移民・出稼ぎ論考編』より

２）ブラジルへの第１回移民 －「笠戸丸移民」

1908（明治41）年６月18日、日本からの正式なブラジルへの移民781人がサントス港に到着しました。彼らの乗っていた船が「笠戸丸」だったことから、この最初の移民は「笠戸丸移民」とも呼ばれています。

「ブラジルには金のなる木がある」という移民会社の宣伝をうけ、多くの移民者がまだ見ぬブラジルへ夢を馳せて出発しました。

約50日間の船旅を終え、ブラジル国に降り立った781人はコーヒー農園の労働者として各耕地へおもむきます。しかし「金のなる木」といわれたコーヒーの木の不作や、労働の未経験、厳しい規則や監視、時には暴力による抑圧を受け、コーヒー農園から逃げ出す人が相次ぎました。

また、ブラジルまでの渡航費を家族や知人から借りていた人は、すぐにでもお金を返済しなくてはならず、儲けの多い仕事を求め各地を転々としたようです。

笠戸丸移民781人のうち沖縄県出身者は325人、その中に豊見城村出身者の24人が含まれていました。24人はブラジル到着後､｢フロレスタ｣というコーヒー農園でコーヒーの実をとる仕事を行っています。コーヒー農園での契約を終了した後は、アルゼンチンへ移り住む人、ブラジル国内にとどまって鉄道工夫の仕事に就く人、帰国した人、死亡した人がいますが、アルゼンチンへ移り住んだ人の詳細が未だ不明なため、現在調査を進めています。

サントス

サントスは、サン・パウロ市から南へ75㎞の位置にある、コーヒー輸出港として発展した地域です。1908年、笠戸丸移民781人が最初に降り立った場所でもあります。旧コーヒー取引所や、日系移民ブラジル上陸記念碑、日本人移民の眠る墓地などがあります｡サントスからサン･パウロ市へ向かうには、イミグランテス（*Imigrantes*）、アンシエタ（*Anchieta*）という２本の道路がありますが、移民がサン・パウロ市へ向かう際には、イミグランテスという道を通ったそうです。沖縄を想い、海の見えるこの地域に移動、定住した人もいます。

日系移民ブラジル上陸記念碑

1998（平成10）年、ブラジル移民90周年を記念してボケロン海岸に立てられた親子３人のブロンズ像。父親の像が指さす方向は、ブラジル行きの船が出港していた日本の神戸港があります。

なお、神戸港にはブラジル移民発祥の地として、2001（平成13）年４月28日、親子３人の像「希望の船出」が建てられました。

６月18日記念碑

1908(明治41)年４月28日、日本の神戸港から出発した笠戸丸は52日間の船旅を経て、同年６月18日にサントス港の14埠頭(ふとう)に到着しました。

それから100年経った2008（平成20）年６月18日、笠戸丸移民上陸を記念し、14埠頭に「６月18日記念碑」が建てられました。記念碑には笠戸丸移民の名が刻まれています。

移民博物館

この建物は、1887（明治20）年から1978（昭和53）年まで、世界各国からブラジルへ渡ってきた移民を一時的に収容する移民宿泊所として使用されていました。この施設に集められた移民たちは、登録手続きや荷物検疫を行うため約一週間滞在し、各農地へと移動しました。1998（平成10）年には､移民の歴史を保護、調査するために改装され、移民博物館として開館しました。税関の検査室や移民たちの寝室、昔の街の様子や笠戸丸移民の乗船名簿などが展示されています。

移民列車

サントス港から移民宿泊所(現在の移民博物館)まで、当時は列車で３時間半から４時間ほどかかりました。今でも多くの移民を運んだ汽車が当時の姿で保存されていて、ボランティアによって運営されています。サントス港から移民宿泊所に到着した際、車掌が各車両をまわって言っていた「サン・パウロに着きました！」のかけ声や、新聞売りなどが再現されています。

大嶺快清（かいせい）　1916（大正５）年生　字渡嘉敷出身　１世（写真右）

ブラジルへは、1934（昭和９）年４月29日、いとこ夫婦とともにアラビア丸に乗って渡航。コーヒー園での契約期間を終えた後は、米や綿、落花生などを栽培していました。それから、サン・パウロ市へ移り住み、露天市(フェーラ)を始めました。

快清氏は、1979（昭和54）年に発足した「豊見城村人会」の初代会長を務めました。

キタンダオオミネ

字渡嘉敷出身の大嶺博二（ひろじ）(故人)の妻・キヨ子氏が現在も経営している八百屋です。キタンダオオミネは1971（昭和46）年頃から経営しており、現在は10人の従業員がいます。

バナナやメロン、パッションフルーツ、カボチャ、アーティチョーク、タピオカ、アボカドなど幅広く取り扱っています。

金城フミ子　1924（大正13）年生　字真玉橋出身　１世（前列左）

1934（昭和９）年に父・金城正雄の呼び寄せで、ブラジルに渡航しました。船はアフリカ丸でした。その船の中で運動会があったことを覚えているそうです。ブラジルでは先に渡航していた、おじを頼りにカンポ・グランデ市で飲食店を経営し、その後は露天市(フェーラ)で果物を売って生活をしていました。

瀬長貞子（さだこ）　1925（大正 14）年生　字豊見城系 3 世（写真中央）

笠戸丸移民である大田向雪（こうせつ）(字豊見城出身)の孫。1947（昭和22）年に豊見城出身の瀬長カメノゾと結婚し、５人の子どもをもうけます。家族で下着製造業「アサヒ」を23年間経営し、現在はサン・パウロ市に在住しています。貞子さんによると、祖父の大田向雪は結婚式や人が集まる場所などで、いつも空手を披露していたそうです。

赤嶺新野栄（しんのえい）　1875（明治 8）年生　字真玉橋出身　1 世（前列左）

1912（大正元）年に、神奈川丸でブラジルへ渡航。コーヒ農園の後にバナナ栽培で成功します。セードロ沖縄県人会、1926（昭和元）年に球陽会セードロ支部長を務め、ジュキア線沿線の県人の生活向上に尽力しました。1968（昭和43）年には学校建設や日本病院建設などの功績が認められ、セードロ地域のメインストリートに「 Rua Shinnoei Akamine(赤嶺新野栄通り)」という名前が付けられました。

城間愛子（あいこ）　1920（大正 9）年生　字真玉橋系 3 世（前列中央）

城間愛子さんは、赤嶺新野栄の初孫です。愛子さんが誕生したとき、「新野栄は乗っていた汽車を駅ではない家の近くに止めてもらい、生まれた子の顔を見に行った」という逸話を話してくれました。

ブラジル沖縄県人会館

ブラジル国内に在住している沖縄県人とその子弟、及び沖縄県人と縁故のある人を会員とし、現在では46支部2,734世帯を会員に持つ大きな団体になっています(2008年現在)。

豊見城出身者の正式な加入者は36人で、戦前に移民した子弟の２世と、戦後に移民した１世が主な会員となっています。

旧コーヒー取引所

ブラジル最大の貿易港であるサントスにある旧コーヒー取引所で1922（大正11）年のブラジル独立100周年を記念して開館しました。ブラジル中のコーヒーが集められ、取引が行われていた場所で、現在は博物館として多くの人が訪れています。

2007（平成19）年には、日本人移民100周年記念事業の一環として「コーヒーとブラジルへの日本移民展」が同館で行われました。

豊見城市民会

1979(昭和54)年９月７日、「豊見城村人会」として発足。初代会長は字渡嘉敷出身の大嶺快清氏が務めました。現在は「豊見城市民会」に名称を変え、主にサン・パウロ市在住の本市出身者及びその子弟が加入しています。会員数は約30人(2009年現在)で、新年会や食事会を行い交流を深めています。

３）豊見城からの笠戸丸移民24人

	渡　航　者	渡航25年目	渡航40年目	渡航50年目	渡航60年目	渡航70年目	仕事の移り変わり	備　　考
1	外間　亀 1889年生 （根差部出身）	ブラジル在		ブラジル在	ブラジル在 1972年死亡	―	フロレスタ耕地（1ヶ年半） ↓ イツーにて牛乳搾りの仕事 ↓ ビール会社 ↓ サントスで波止場人足（6年間） ↓ ビリグイにてノロエステ鉄道工夫（6ヶ月） ↓ カンポ・グランデ市で測量技士（6ヶ月間） ↓ 運搬業 ↓ 野菜栽培・販売	1968年7月、勲六等瑞宝章授賞。
2	（妻）ミト 1889年生 （根差部出身）	ブラジル在	1947年死亡	―	―	―		
3	赤嶺喜左 1882年生 （嘉数出身）	ブラジル在	ブラジル在	?	?	?	フロレスタ耕地 ↓ 逃亡 ↓ ノロエステ鉄道工夫 ↓ カンポ・グランデ市にて菜園経営	
4	大城良宗 1882年生 （根差部出身）	ブラジル在	?	ブラジル在 1964年死亡	―	―	フロレスタ耕地 ↓ イツーの耕地（半年） ↓ エピタシオにて鉄道工夫 ↓ サントス ↓ エスペランサ ↓ 帰国 ↓ 再度ブラジルへ ↓ カンポ・グランデ市 ↓ アキダウアナ	帰国時期、理由等は不明。
5	大城宗人 1868年生 （根差部出身）	帰国	―	―	―	―	フロレスタ耕地 ↓ 帰国?	1968年7月、勲六等瑞宝章授賞。

	渡　航　者	渡航25年目	渡航40年目	渡航50年目	渡航60年目	渡航70年目	仕事の移り変わり	備　　考
6	大田　亀 1884年生 （豊見城出身）	ブラジル在	ブラジル在	1953年死亡	―	―	フロレスタ耕地 ↓ さまざまな職を転々とする ↓ カンポ・グランデ市への移住 ↓ 夫・亀は農場労働、石炭販売 妻・カマトは他の家庭の洗濯物を請け負う	日本で結婚しブラジルへ渡航。 ウチナーグチしか使用しなかった。 子ども10人、孫32人、ひ孫78人、 玄孫18人まで広がっている。
7	新垣カマト 1890年生 （高安出身）	アルゼンチンへ転住	?	?	?	?	フロレスタ耕地 ↓ アルゼンチンへ転住	アルゼンチンに転住。その後の詳細不明。
8	大城幸喜 1889年生 （上田出身）	ブラジル在	ブラジル在	ブラジル在 1967年死亡	―	―	フロレスタ耕地 ↓ カンポス・ネット耕地（4ヶ月） ↓ ポルト・エスペランサにて工事監督（7年間） ↓ 鉄道の薪木燃料請負、枕木請負（5年間） ↓ ドラードスへ入植（最初の邦人）し、珈琲栽培 ↓ カンポ・グランデ市にて商店 ↓ 商店を焼かれる ↓ 幸喜、失明	移民50年祭にて表彰。
9	（妻）カメ 1891年生 （上田出身）	ブラジル在	ブラジル在	ブラジル在	ブラジル在 1968年叙勲	ブラジル在 1983年死亡		1968年勲六等瑞宝章授賞。 大城立裕著『ノロエステ鉄道』のモデル。
10	外間長信 1883年生 （高安出身）	アルゼンチンへ転住	?	?	?	?	フロレスタ耕地 ↓ アルゼンチンへ転住	アルゼンチンに転住。その後の詳細不明。
11	大城加那 1894年生 （上田出身）	アルゼンチンへ転住	?	?	?	?	フロレスタ耕地 ↓ アルゼンチンへ転住 ↓ ブラジルへ再移住 ↓ マラリアに感染し、死亡	
12	大城蒲戸 1884年生 （上田出身）	アルゼンチンへ転住	?	?	?	?	フロレスタ耕地 ↓ アルゼンチンへ転住	アルゼンチンに転住。その後の詳細不明。

	渡　航　者	渡航25年目	渡航40年目	渡航50年目	渡航60年目	渡航70年目	仕事の移り変わり	備　　考
13	新垣　亀 1891年生 （高安出身）	アルゼンチンへ転住	?	?	?	?	フロレスタ耕地 ↓ アルゼンチンへ転住?	アルゼンチンに転住。その後の詳細不明。
14	 儀保弘斉 1875年生 （上田出身）	帰国	—	—	—	—	フロレスタ耕地 ↓ 帰国?	帰国時期、理由等は不明。 外務省の記録には「儀保」となっているが、正しくは「宜保」。
15	大城保吉 1873年生 （上田出身）	アルゼンチンへ転住	?	?	?	?	フロレスタ耕地 ↓ アルゼンチンへ転住	アルゼンチンに転住。その後の詳細不明。
16	 金城盛吉 1893年生 （饒波出身）	アルゼンチンへ転住後、再度ブラジル転住	帰国	ブラジル在	ブラジル在	?	フロレスタ耕地 ↓ イツーにて家庭奉公（半年） ↓ ノロエステ鉄道工夫（2ヶ月） ↓ アルゼンチンへ転住（5年間） ↓ ブラジルへ ↓ ソロカバナ線イタチンガ駅のシトラ耕地でコロノ ↓ ジュキア線アンナ・ジーアス駅に移り米作（2年間） ↓ セードロ駅で米作とバナナ栽培 ↓ サン・パウロ市にて商取引き	アルゼンチンに転住後、ブラジルに再移住。 1968年7月、叙勲。
17	金城盛四 1871年生 （饒波出身）	ブラジル在	ブラジル在	?	?	?	フロレスタ耕地 ↓ その後は不明。	金城盛吉の父。 大城幸喜にノロエステ鉄道工夫募集の話をもちかける。

	渡　航　者	渡航25年目	渡航40年目	渡航50年目	渡航60年目	渡航70年目	仕事の移り変わり	備　　考
18	大城蒲戸 1882年生 （上田出身）	ブラジル在	ブラジル在	1950年死亡	―	―	フロレスタ耕地 ↓ ノロエステ鉄道工夫 ↓ カンポ・グランデ市にて菜園づくり	
19	（妻）ウト 1885年生 （上田出身）	ブラジル在	ブラジル在	1952年死亡	―	―		農業の傍ら、産婆として邦人間で活躍。
20	大城亀代 1880年生 （上田出身）	アルゼンチンへ転住	?	?	?	?	フロレスタ耕地 ↓ アルゼンチンに転住	アルゼンチンに転住。その後の詳細不明。
21	外間蒲戸 1892年生 （高安出身）	アルゼンチンへ転住?	?	アルゼンチン在	?	?	フロレスタ耕地 ↓ アルゼンチンに転住	アルゼンチンに転住。その後の詳細不明。
22	長嶺加那 1873年生 （長堂出身）	死亡	―	―	―	―	フロレスタ耕地 ↓ 死亡	死亡年月日、死因は不明。
23	大田向雪 1881年生 （豊見城出身）	ブラジル在	ブラジル在 1943年死亡	―	―	―	フロレスタ耕地 ↓ サントスで港湾工夫 ↓ アルゼンチンへ転住 ↓ マットグロッソのアキダウアナで鉄道工夫（息子を呼び寄せ） ↓ プロミッソンで農業。 綿、コーヒー栽培、米、豆などを栽培。 ↓ パラガスパウリスタのアーグァデミンチーナで農業（綿）。	1915年頃、バレーロ植民地に県人15人とともに入植。 同植民地への入植の経緯は不明。
24	具志章七 1891年生 （豊見城出身）	死亡	―	―	―	―	フロレスタ耕地 ↓ 死亡	アルゼンチンに転住。その後の詳細不明。

５）カンポ・グランデ市について

ブラジル国マットグロッソ･ド･スウ州の州都であるカンポ･グランデ市は、サン･パウロ市から西へ990km、標高約600mに位置する鉱業で発展した街です。カンポ・グランデとは、ポルトガル語で「大原野」という意味で、褐色の肌を持つ人が多く住んでいることから「シダーデ・モレーノ（Cidade Morena＝褐色の街)」という愛称で親しまれています。

日系人の多く住む街として有名な地域で、約1万2,000世帯ある日系人世帯のほとんどが、沖縄県出身移民で占められています。カンポ・グランデ市では、以前ノロエステ鉄道の敷設工事が行われていたため、その工事にたずさわっていた沖縄県出身移民がそのまま定住し、現在にいたっています。

沖縄文化が色濃く残る地域で、2006（平成18）年７月、沖縄そば（SOBA）が、市の文化遺産として指定されました。

カンポ・グランデ市は、名護、大里に次いで豊見城出身者が多く住む地域です。

ノロエステ鉄道

沖縄県出身移民の多くがこの工事に携わりました。現在は使用されていません。豊見城出身の笠戸丸移民の大城幸喜（こうき）・カメ夫妻、大城良宗（りょうそう）、大城加那（かな）、外間亀（かめ）・ミト夫妻、金城盛吉（せいきち）、大田向雪（こうせつ）、大城蒲戸（かまと）、赤嶺喜左（きさ）もこの工事に携わっていました。

ノロエステ鉄道工事は、原始林を切り開き、鉄道のレールを敷くために土を盛り、枕木を敷設するというものでしたが、マラリアや重労働により20数名が命を落としました。

開拓先駆者慰霊碑

字高安出身の金城安定（あんてい）を中心に、1982(昭和57)年６月１日、知花アルマンド総合運動場内に建てられました。金城安定は、移民の先駆者としてこの地で活躍した方々の霊を慰めるために慰霊碑の必要性を説き、賛同した友人や母県沖縄からの援助を受けて、この碑を建てたそうです。毎年６月18日の移民の日には、この慰霊碑の下で慰霊祭が行われています。

中央市場

毎週水・土・日曜日に開催されています。沖縄そばをはじめ、焼きめし、焼きそば、ケーキ、その他日用雑貨が販売されており、多くの人が利用しています。

特に人気があるのは沖縄そばで、ブラジル人の多くは牛肉や卵焼き、ネギの乗った沖縄そばに醤油を入れ、フォークや箸を使い食べています。

サント・アントニオ墓地

カンポ・グランデ市内にある墓地です。大城、金城、新垣、島袋、仲里など、沖縄の姓が記されているお墓が多く、字上田出身である大城幸喜・カメ夫妻のお墓も確認できました。中には、日本の家紋が入っているお墓もありました。

宗教によってお墓の形態が異なっており、大きなモニュメントが建っているものや小屋になっているもの、プレートだけのものや日本式のものなど、多種多様なお墓を見ることができます。

歓迎会

カンポ・グランデ市で調査を行った際、豊見城出身者が開いてくれた歓迎会の様子です。約60人が駆けつけてくれ、琉球民謡で歓迎されました。

外間（そとま）ウト　　1909（明治 42）年生　　字根差部出身　1 世（写真右）

ブラジルへは、1932（昭和７）年、ぶえのすあいれす丸で渡航。野菜やバナナを売って生活してきました。一度、沖縄に帰った時には字豊見城の宜保成晴医師の下で働いていたそうです。

宜保医師は非常に優しい方で、再びブラジルに行くと伝えると「沖縄が良いから、ここに居なさい」と引きとめてくれたそうです。

金城文子（ふみこ）　　1915（大正 4）年生　　字座安出身　1 世（写真中央）

豊見城で小学校を卒業後、和歌山県の工場で休むことなく20歳まで働き帰郷し、17歳年の離れた金城三良（さんら）(字真玉橋出身)と結婚しました。その後、1937（昭和12）年ブラジルへ渡航、最初の２年間は「どうしてこんなところに来てしまったんだろう・・」と毎日泣いて過ごしたといいます。

ポルトガル語での売り買いを何度も聞いて覚え、庭に実ったマンゴーの実を売り歩きました。

郷土民謡クラブ

毎週日曜日、カンポ・グランデ市沖縄県人会館で開かれている民謡クラブの練習風景です。琉球民謡を指導しているのは翁長系２世の福地ツトム氏です。ツトム氏の息子が三線を弾き、それに合わせて民謡を歌います。

郷土民謡クラブへの参加者は、沖縄県人だけでなく他府県出身者も含まれていて、沖縄の方言や琉球民謡に触れる良い機会になっているそうです。

６）証言

ブラジルでは46人の方から聞き取り調査を行いました。ここでは３人の方の証言を紹介します。

赤嶺（あかみね） 尚由（ひさよし）　　戦後移民１世　1941年生　字渡嘉敷出身／サン・パウロ市在

調査日：2006年10月９日　　場　所：ホテルまるき（那覇市）

聴　取：与那嶺豊、赤嶺みゆき

反　訳：赤嶺みゆき　　文：當銘涼子

赤嶺尚由氏は1941（昭和16）年３月13日に豊見城村字渡嘉敷にて赤嶺新栄、ウメの四男として生まれる。屋号は新川端（ミーカーバタ）。兄弟姉妹は７人で上から長男の芳雄（故）、次男の芳信（故）、三男の芳重（故）、長女の信子、次女のケイコ、三女の乃理子である。尚由氏には戦後移民の１世としての渡航経緯やブラジルでの暮らしを中心に話を聞きました。

ブラジルへ　　尚由という私の名前は、親父が占い師みたいな人に特別に付けてもらったと聞きました。親父は沖縄戦から終戦直後まで字渡嘉敷の区長をやっていました。私が４歳の頃に戦争が起きますが、その時のことを少し覚えています。ヤンバル（沖縄本島北部）に疎開していたときの、大木を引き裂く爆弾の破裂する音や破片が飛び散る音などは今でも忘れられません。学生の頃、宜保キミ先生という有名な先生がいました。このキミ先生に「赤嶺さん、あなたは物を書く文章力が優れているからそれを活かしなさい」と言われました。糸満高校を卒業後、約１年は母と一緒に畑仕事をしていました。私はどうしても勉強したいという気持ちがありましたが、戦後の沖縄ではまともな仕事もなく、サトウキビ畑と家との往復の日々に「自分は死ぬまでこんな生活を送るのは嫌だ」と思い、唯一希望が持てた外国の地を夢みるようになりました。ブラジルへは三男の芳重が夫婦で渡航していました。その兄の呼び寄せで19歳の頃、母のウト、姉の信子、妹の乃理子の４人で渡航しました。船はアフリカ丸でした。那覇の港から神戸へ行ってそこからブラジルに向かいました。

サントスに到着したのは1961（昭和36）年６月のことです。サントス港には同じ字渡嘉敷出身の大嶺博二が迎えに来てくれてました。その時に博二さんがフェジョアーダという豆とお肉の煮込み料理を食べさせてくれました。その味がとても自分に合っていて、「自分はブラジルを好きになれる」と思いました。

バウルー　　ブラジル着後は兄の芳重とともに、サン・パウロから約300㎞離れたバウルーで農業を６ヶ月間やりました。私は勉強がしたいという想いがあったので、現地の新聞を買って、意味は分かりませんが目を通していました。英語が得意だったので１年ではポルトガル語を読んで意味を理解するようになりました。しかし、会話ができるのには時間がかかりました。ある日、私は兄に自分で働いて勉強をするからサン・パウロへ行かせてくれと頼んで、単身サン・パウロへ移り住みました。

サン・パウロへ　　サン・パウロでは大学（夜学）の法科に入学後、パウリスタ新聞（邦字新聞）の記者として働き始めました。夜学ではブラジルの法律や言葉の勉強などをしましたが、授業が遅くまであったので欠席する日の方が多く、仕事との両立が難しくなりました。大学は２年で辞めました。しかし、その頃の仕事がポルトガル語での記事を日本語に訳していくことだったので、それが生きた勉強になりました。おかげ

でポルトガル語の単語をたくさん覚えることができました。その反面、話すのは遅れました。今でも、当時使っていた辞書を大事に持っています。私の勉強の仕方は独学ですね。また、新聞記者になるきっかけは、宜保キミ先生に文章力を褒められたのを思い出して新聞社の試験を受けたのです。そして合格しました。

この新聞社は現地の一流紙に出ている政治や経済の記事を日本語に訳して邦字新聞とし、日本から移民した人たちのために発行していました。私は入社当時から政治経済の担当でした。新聞社ではほとんどがナイチャー（日本本土の人）でしたが、とても良い先輩達に恵まれていて、私は「嶺ちゃん」と呼ばれていました。私の書いた記事を編集長が見て「嶺ちゃん、この文章だったら何にもならんよ。文というのはそんなもんじゃないよ、あなたはおしゃれをしようとしてはダメ、文章はもっと自分の心を書かなきゃダメッ」と言われ、私に文章の書き方を教えてくれました。この新聞記者の仕事を11年間勤め、30歳からはソールナッセンテ人材銀行で勤めています。現在は人材銀行のかたわら、毎日インターネットで日本商工会議所のコンサルタント部会のメーリングマガジンなどでブラジルの政治経済についての記事を書いています。私が書いた記事には「オブリガードと言う泥棒」と「春を売る女の悲しみ」というのもあります。

ソールナッセンテ人材銀行　　パウリスタ新聞の大先輩である茨城県出身の若松タカシ氏が、私が新聞社を辞める時に声をかけてくれました。辞めるのであれば、自分の仕事を手伝ってくれということでした。若松氏は「自分はいくつか会社を作るから、その一つをあなたに任せるので」ということでした。そうして始めたのが、今のソールナッセンテ人材銀行です。なぜ人材銀行かというと、ブラジルでは1970（昭和45）年の始めから、第一次企業進出ブームといわれ、日本からブラジルへの企業進出が非常に盛んになった時期でした。その企業向けの人材として日本語やポルトガル語の分かる日系の人材を何とか売り込もうじゃないかと考えて作ったのがこの会社です。1973(昭和48)年に始めました。おそらく日本からブラジルへ進出していった企業の80%ー90%の会社に私たちの人材を売り込んだ実績があります。私は人材銀行の仕事をしながら、ブラジル日本商工会議所の財務担当理事を４年、専任理事を４年しました。役員として沖縄出身の人が就任するのは私が初めてで、かれこれ35年ほど人材関係の仕事をやっています。

私はこの仕事を行うために1978（昭和53）年に帰化しました。現在はブラジル国籍を所有しています。ブラジル日本文化協会とブラジル沖縄県人会の評議員もやっています。

妻・磯乃子（そのこ）　　私たち夫婦には息子が１人います。妻の磯乃子は西原出身の１世です。私が渡航する３年か５年ほど前にブラジルに渡っています。私が30歳のとき沖縄県人会で紹介されました。妻はすでに日本語の教師として働き、私より生活レベルが上でした。出会った頃にはすでに土地も所有していました。現在もウチナーンチュの留学生や企業研修生らにポルトガル語を教え、また現地の学校などで日本語を教える仕事を40年間やっています。また、ここブラジルで沖縄県からの笠戸丸移民についての調査を行っています。

豊見城市民会について　　豊見城村人会発足当時には書記を担当しました。現在は「村人会」から「市民会」へと名称を変え、新年会などの行事を１年間に１、２回は行います。１世の会員は数えるほどしかいません。だいたいは２世、３世で、会員数は150人ぐらいですかね。また市民会に入っている２世や３世は、日本語はまずできません。なので、現在は毎年ブラジルから２人ほど、沖縄県の市町村に子弟研修として受け入れてもらっています。研修期間は３ヶ月程です。しかし豊見城市にはこの受け入れ事業がないので寂しいですね。

大嶺（おおみね） 快清（かいせい）　　戦前移民１世　1916年生　字渡嘉敷出身／サン・パウロ市在

調査日：2008年９月２日　　場　所：大嶺快清氏自宅
聴　取：町田宗博、赤嶺みゆき　　通　訳：赤嶺尚由、久保田喜美子
反　訳：赤嶺みゆき　　文：當銘涼子

大嶺快清氏は1916（大正５）年10月16日、フィリピンにて字渡嘉敷出身の父と母（豊見城村出身）の長男として生まれる。４才の時に母、弟と帰郷し、豊見城村字渡嘉敷で弟３人、妹６人とともに育つ。妻のキヨは1921（大正10）年６月８日に豊見城村字渡嘉敷で生まれる。

１世の快清氏には、ブラジルへの渡航経緯や耕作地での話を中心に聞きました。

ブラジルへ　　私は1916年10月16日にフィリピンで生まれました。屋号は東新大嶺（アガリミーウフンミ）です。私の母は実父に遊郭に売られるという際どいところで、その情報を聞いた父が母を受けとってフィリピンに連れて行ったそうです。そして私と弟がフィリピンで生まれました。私が４つの時に、母は私と弟を連れて沖縄に帰ってきました。兄弟姉妹は弟３人に妹が６人で､そのうち弟２人と妹６人は沖縄生まれです。ブラジルに行く前は字渡嘉敷で農業をしていました。ブラジルに行く気は無かったのですが､父の兄（四男）である大嶺快助（かいすけ）・トヨ夫婦に勧められて一緒に来ました。渡航条件に３、４人の家族を構成しないと行けなかったからです。ブラジルへは1934（昭和９）年18歳の時にアラビア丸で渡航しました。

私がブラジルへ行くことを聞いた母は、出発のとき50銭のお金を持って餞別に来てくれました。家族移民はファゼンダ(耕地)に配耕されました。

アルベルチーナ大耕地　　私たちが配耕された耕地は、ソロカバナ支線ファゼンダアルベルチーナという耕地でした。ここはコーヒー園で、契約は１年間でした。コーヒー園ではコーヒーの実についている土や葉っぱをはらい落とす作業をしていました。収穫時になったら砂だらけになって作業がとても大変でした。１人で２ー３人分のコーヒーの実をはらい落とさなければならなかったのです。日本から来た時期で若いし、何も財産がありません。たった50円の旅費をあてにしてブラジルに来たので、着の身着のままの裸一貫で仕事をしていました。

初めて大耕地に行った時、ササキさんという方が、地主であるスペイン人のアントニオ・フランクに頼まれて、配耕される３家族をサントスまで迎えに来てくれました。ササキさんは大耕地の土地を借農してた方でした。私たちはサントスから出発前に弁当を渡されていたので、それを汽車の中で食べてサン・パウロに着きました。大耕地に着いたら３家族が入るコロニアに家が建っていました。しかし、このコロニアは牧草地の中にあったため家の周りは牛の糞だらけでした｡その近くに日本人のイシダさんという方が住んでいて、糞だらけのコロニアを掃除して入りなさいと指図されました。ここに入った晩は臭くて眠れませんでした。

住んでいたコロニアから仕事場のコーヒー園までは、１㎞半も歩かなければならない距離でした。１家族で5000本のコーヒーの木を受け持ちました。ということは、私たちは３人で5000本受け持つということでした。5000本を受け取った日からコーヒーの実を採るまで毎日草取りをしました。雨期になると大雨が降って草がよく生えて大変でした。毎朝６時頃､私たち３家族が入ったところに監督官が来てラッパを鳴らします。ラッパが鳴る前には１㎞離れた農園に行って準備をしておかないとなりませんでした。

収穫期は10月いっぱいで終わるはずでしたが、私たち３家族は14万本のコーヒーの実採りを済ませてから大耕地を出たので少し出るのが遅れました。すると地主から「お前達はたった３家族でよくこれだけの実採りをやってくれた」と、かえって褒められ、休んでいる土地を私たちに貸してくれました。そこで農業を５

ー６年やりました。大嶺快助は借りた土地を返した後にパウリスタ線のルッセリアに２万２千㎡の土地を買いました。ブラジルに来て５ー６年経た後に、２万２千㎡の土地を買ったということは大成功者の証でした。

パウリスタ線のルッセリア　　パウリスタ線のルッセリアの土地に、賃借契約した日本人の５家族が入りました。その５家族の内の１人が従兄弟の大嶺快助です。私は快助が土地を買ったという話を聞いたので一緒について行きたいと思い、自分もそこに移りました。沖縄からこんなに遠く離れた所に来たら、やっぱり身内が一番大切です。ルッセリアの新開地は低地だったので安く買えたそうです。なので、普段は何でもない川の側でも大雨が降ると増水して畑が浸かりました。ここでは綿や米を作っていて、はじめの年はお米が良くできました。しかしコーヒーが育つような土地ではなかったので、土地の条件が良くないということで、ここに入った４家族は２年目で出て行きました。快助も「自分も土地を売ってここを出て行かなきゃいかん」ということになって、３年目には全部売って出ました。私たちの家は一番近い街に行くバスに乗るために12㎞も歩かなければならない所でした。ここで暮らしている時に妻のキヨを沖縄から呼び寄せました。

妻を呼び寄せる　　妻のキヨは私がブラジルに来て７年目に呼び寄せました。快助と一緒にサントスまで行き、家内をぶじ迎えました。サントスから汽車でアグードスに行き、そこからルッセリアに帰ろうとタクシーを待っていると、日本本土出身の見知らぬ青年が私に話かけてきました。「ちょっとお伺いしますが、私はアラビア丸に乗ってサントスに来ました。ノロエステ線のリンスという街にいる某という人に呼び寄せられて来たのですが、その人が迎えに来てないのです。私は行く先が分からなくて困っています。すみませんが、私はどうしたら良いでしょうか？」と。私は「次の駅はバウルーという所なので、その駅の側にホテルを経営しているサバオさんという日本人がいます。そこに泊まってお世話になったら良いでしょう。リンスはバウルーの次の駅ですので」と答えました。その青年とはそこで別れたのですが、その後どうなったのか知りません。呼び寄せで来て、迎えが来ないということはよくあることでした。

私たちは、タクシーに乗って家に帰りましたが、その途中２本の木が道に倒れていました。ちょうど綿の収穫時期だったので、泥棒が金を盗むためにわざと倒したのでは？と思ったのですが、大丈夫でした。木が倒れていたためそこから先はタクシーでは行けず、私たちは２㎞離れていた家まで真っ暗闇の山の中を歩きました。私は妻のトランクも担いでいました。この時妻は、「沖縄では真っ暗闇を歩いたことがなかったのでとても怖かった」と言ってました。

妻･キヨの証言　　私は1921（大正10）年６月８日生まれです。ブラジルに来るまでは農業をしていました。日米戦の始まるちょっと前に沖縄から神戸に行き、神戸で数日すごした後にアラビア丸に乗船、サントスに着きました。サントスでは周りを見る余裕はありませんでした。夫の快清に迎えに来てもらえたので、すぐ家に着きました。一緒に船で来た人で、迎えが来なかった人もいたと思います。船には家族連れや花嫁移民、単独移民の人々が多く乗っていました。女性もたくさん乗ってました。豊見城村から一緒に来た人はいません、同じ船に乗った方たちとはサントスでそれぞれ分かれました。私が乗ったアラビア丸は、戦前、日本からブラジルへの最後の船だったようです。周りには何隻かの船がくっついていました。船内では「あれは日本の船で自分たちを護衛してくれているのだ」と聞きました。

サン・パウロへ行く　　快助が購入した川の側の土地から出た後、白人の土地で農業に従事しました。白人の土地に植えてあった落花生が豊作になって、ちょっとお金が貯まってきたのでルッセリアから７㎞離れたサルバソン植民地という所に自分の土地を買いました。自分の土地を買ったので白人の土地から出ようとし

たら、気に入られ出してもらえませんでした。白人の大地主に「自分の土地を買ったのでそこに移ります。お世話になりました」と話したら出してくれました。自分の土地にはトウモロコシを植えながら７ー８年住みました。でも、天候に恵まれずに不作が続き、この有様では百姓をしていては儲からないということで1968（昭和43）年の末には、従兄弟の大嶺博二を頼ってサン・パウロに行きました。

サン･パウロに出るということで、ルッセリアで買った56,250坪の土地を売り、市場の売店を買おうと思っていたのですが資金が足りず、持っていたトラックも売り、やっと７m30cmのフェーラのバンカー（Feira；青空市場の売店の意味）を買うことができました。息子と３人でお店をやっていた時はよく売れましたが、息子が分家して１人になったら経営がうまくいかなくなりました。この売店を何年続けたかは覚えていません。

大嶺博二（ひろじ）の父について　大嶺博二は、私の妻の従兄弟です。私の妻と博二の父親同士が兄弟で博二のお父さんは三線の先生でした。豊見城にいるときは､字渡嘉敷でお祝いとか何かの行事の度に三線弾きでしたよ。特に結婚式の時は三線ばかり弾いているから、ご馳走も食べられなくて損だと笑ってました。妻の父の姉弟は、四男一女です。妻の父は長男で、三男おじさんと同じフィリピンに行きました。博二の父は次男で、実家の土地を守っていたのでどこにも行きませんでした。四男おじさんはブラジルに来ました。確か1972（昭和47）年にブラジルに来た時、三線を譲り受けました。ルッセリアにいる時には豚油の入っていた缶に木切れを付けて、釣り糸を張った手作り三線で弾いてました。その三線は缶が錆びてしまって、今はありません。

豊見城での想い出　私が尋常小学校６年生の時だったと思うのですが、同級生で字与根出身の大城盛一さん（15、16、19代豊見城村長）と一緒に学芸会に出ました。戦争が終わって与根で再会した時に「元気で良かった」と言って互いに抱きあって涙を流しました。私がブラジルに帰ってからも盛一さんは、わざわざ手紙を送ってきてくれました。今でも記念品として大事にしています。

豊見城村人会について　豊見城村人会を結成したのは70年代の初め頃で、私はその初代会長です。発足時の写真は子どもらが持って帰ってしまって手許にありません｡昔の写真というのもあまり残ってないのです。

私はブラジルに来てからずっと日記を付けていました。ですが、その日記帳も引っ越しなどでしまう場所を変えたりして、どこにあるのか分からなくなりました。

民謡クラブ　沖縄県人会ビーラ・アルピーナ支部の民謡部に参加しています。毎週木曜日の午後３時ー６時の３時間、練習しています。先生はサンタクララからいらっしゃいます。民謡部に入ったきっかけは、沖縄の唄が恋しくて､また懐かしむためです。三線は従兄弟の大嶺博二から譲ってもらいました。博二の父が、博二に三線をプレゼントしたのですが､彼は夜の仕事をしていて三線を弾く暇がないということで､私に譲ってくれたのです。そのおかげでちょっと三線の爪弾きを覚えられました。でも一つ二つしかまだ覚えてないです。この三線は会館に置いてます。民謡を習うというのは簡単そうに見えて結構難しいですね。それでも私の得意な唄は「懐かしき故郷」です。この唄は大嶺博二の父がブラジルに来たときに教えてくれました。

信仰　1960（昭和35）年前後から生長の家に入っています。私が田舎の山の中に住んでいた時で、生活などで苦しんでいて、それに対する「何か」を教えてもらったのが生長の家でした。おかげで生活そのものを助けてもらいました。やっぱり人間は信仰生活もやらないとだめだなぁと思いました。生長の家の会館はビラ・プルデンテにあって、そこに通っています。ブラジル支部はジャバクアラにあります。ビラ・プルデンテ会館には月に何回か通い、集まりにも行きます。「真理」の勉強をした日系の二世、三世がブラジル人に

指導もしていますよ。最近では白人も増えてきました。

沖縄への里帰り　1972ー1973（昭和47ー48）年の間に病気の義母をブラジルへ連れて来るために、沖縄に里帰りしました。義母はブラジルへ行きたがりませんでした。それを義母の兄弟の説得により３ヶ月後に私と一緒にブラジルへ行くことができました。しかし一緒に暮らせたのは２年ぐらいでした。

沖縄に久しぶりに帰って思ったことは、自分の住んでいたところがあれこれと変わっていて、とにかく寂しいことが多かったのです。自分が大学を出てもっと勉強をしていたらなぁと、考えたりすることもありますが、もしそうであっても、同じ沖縄に住んでいても、余所に出て心を広く大きく持ち歩く生活、習慣は得られなかったんじゃないかとも思います。それを考えた時､やっぱり沖縄を出て思い切り自分で働かないと、良い結果も悪い結果も得られないんだと感じました。

大嶺（おおみね）　勉（つとも）　２世　1946年生（字渡嘉敷出身・大嶺快清の息子）／サン・パウロ市在

調査日：2008(平成21)年９月６日(土)　場所：沖縄県人会館

聴　取：町田宗博　反訳：當銘涼子　文：比嘉香織

大嶺勉氏は1946（昭和21）年にサン・パウロ州奥地のルッセリア市サルバソン植民地にて字渡嘉敷出身の大嶺快清、キヨの下に生まれる。５男２女の７名兄弟である。両親は借地農で、勉氏も22歳まで農業に従事していた。その後、家族で露天市場（フェーラ）をするためサン・パウロ市に移る。仕事と学業を両立しながら中学、高校、大学まで通い、JICAに就職。定年退職した現在もJICAの嘱託員をしている。仕事と学業の両立生活や２世としての想い、日系組織などについて話を聞きました。

田舎での農業からサン・パウロ市へ

父の大嶺快清が田舎でやっと土地を購入できたのが1960（昭和35）年です。田舎というのはサン・パウロ州奥地のルッセリア市サルバソン植民地です。それまではずっと借地農でした。その後は自分の土地で農業をやりながら、空いている土地を借したりもしていました。ひまわりを植えた事もありましたが、主に栽培していたのは綿、落花生、とうもろこしでした。1968（昭和43）年に農業を辞めて、露天市場（フェーラ）をやるために田舎からサン・パウロ市に出てきました。

仕事と学業の両立

1950（昭和25）年ー1960（昭和35）年頃まで住んでいた田舎で、仕事を手伝いながら当時の義務教育にあたる小学校４年生までは学校に通いました。今でこそ中学は義務教育になっていますが、当時はまだ義務教育ではありませんでした。

サン･パウロ市に移り住んでからの約12年間は露天市場（フェーラ）をしていましたが､1980（昭和55）年、33歳になって中学に通い始めました。30代から中学に通い始めるのは珍しい方でしたが、私のように仕事をしながら中学、高校に通う日系人は少なからずいました。みんな仕事持っている人ばかりなので学校は夜学でした。「速成」といって、通常の１年分を半年で学ぶというようなシステムでした。なぜ33歳で中学に通い始めたかというと、サン・パウロ市で露天市場(フェーラ)をやりながら、周りからいろいろな刺激を受けているうちに「あぁ、どうしても通いたい」という気持ちになったからです。それがきっかけとなって思い

立った翌日には入学しました。田舎で農業しながら学校に通うとなると本当に大変で難しいと思うので、もしあのまま田舎で農業を続けていたらおそらく中学には通えなかったと思います。

中学を無事に卒業して高校に通いました。通常だったら中学が４年、高校が３年の合計７年、卒業するまでにかかりますが、夜学の速成の場合は１年のものを半年で勉強するので、中学に２年、高校に１年半の合計３年半で卒業する事が出来ます。しかし僕は市の文化教育局が主催する検定試験を受けて合格したので、中学を１年半で終える事が出来て、夜学の人たちよりも半年早めに高校に上りました。その後も露天市場（フェーラ）の仕事を続けながら大学にも通って、経営学を４年間学びました。

1980（昭和55）年には赤嶺（尚由）さんの紹介で、ここから70㎞離れたサントスの手前にある製鉄所で通訳として働き始めました。そこで２年半、日本語とポルトガル語の通訳をしました。そこからまた別の仕事場で３年間勤めた後、今の仕事であるJICAに大学４年生の時、39歳で就職しました。実際に大学を卒業したのは1986(昭和61)年の12月で、僕はもうすぐ40歳になる頃だったと思います。定年退職した現在も嘱託員としてJICAに勤めています。かれこれJICAにはもう22年半働いている事になります。

結婚は34歳の時にしました。結婚後も朝は毎日70㎞離れた製鉄所で仕事をし、夜は中学、高校に通う生活を送っていました。子どもは３人で、一番上が25歳になります。２人は大学を卒業していて、今は末っ子が大学４年生です。

独学で学んだ日本語

日本語は全くの独学です。日本語学校に通ったというのはありません。田舎にいた頃、結構日本人のみなさんが周りに住んでいました。昔の植民地と言うのか、日系のいろいろな会もあって、その会などに参加することによって、子どもの頃から日本語を少しずつ覚えるようになりました。それからだんだん日本語に興味を持ち始めて、農業しながら朝４時頃に起きては自分で勉強したりと、自分で好きな時に好きなようにやったので全くの我流です。文法とかそういうものは全然分かりませんが、子どもの頃から日本語自体は聞いたり話したりしていたので会話は出来ました。

33歳で中学に通い始めましたが、「高校、大学を卒業しても何の仕事に就くのだろう？」と自分の中で考えた時に、「自分には日本語がある。だから日本語を仕事のベースに出来れば」ということで、日本語を使う仕事を常にイメージしていました。そうやっていろいろと心に思っていた事が様々な形で実現していきました。最初の仕事は通訳、その次の仕事もやっぱり日本語を使っての仕事でしたし、今のJICAでももちろん日本語を使います。そういう意味では幼い時から周りの皆さんにいろいろ教えられて可愛がられていた経験が、人生の本当の役に立っています。

初めて訪れた沖縄

日本には1990（平成２）年に１度だけ行った事があります。竹下登（元総理）が提唱された「ふるさと創生金」というブラジルの日系２世のみなさんを紹介する事業があって、その第１回目のグループで日本に行かせてもらいました。その時に初めて沖縄や豊見城にも行きました。沖縄の那覇は予想以上に活気があって整備もされているし、キレイな街と言うのが第一印象でした。沖縄といったら色々なイメージがあると思いますが、本当に心、気持ちが温かいというのを感じました。サン・パウロ市にいる沖縄出身の人も、地方から来た人には親切に仕事や家を探したり、私たちがサン・パウロ市に出てきた時もいろいろお世話してくれて、助け合おうという気持ちが強いのではないかと感じます。頼母子講（たのもしこう）といって、今は少なくなってるでしょうが、3ー40年前は沖縄出身のほとんどの人が加入していました。当時は他の県の人が頼母子講をやっているというのはあまり聞きませんでした。やっぱり沖縄の皆さんが隣近所声をかけて、何十家族が集まって頼

母子講に加入する事によって、互いに経済的な支援をやっていたのではないかと思います。これは沖縄の皆さん独特のものだったのではないかなと思います。県系の人を温かく迎えるという事は、自分たち沖縄出身の者として非常にありがたいなという気持ちになります。ブラジルで生まれ育ってはきましたが、親からの影響もあるのか、やはり「沖縄は他の都道府県とはまた違った、独特のものを持っている」というのを子どもの頃から感じていました。

ブラジル２世としての苦労

生活は貧しかったのですが、１世の皆さんに比べると私たちの苦労なんて、苦労の内に入らないかもしれません。父が1933（昭和８）年頃、17歳で移住してからずっと借地農をしていたにもかかわらず、やっと馬１頭買えたのが1954（昭和29）年になっての事です。農業をやる時に馬は大事なポイントになります。それまではずっと隣の日本人の方と共同で馬１頭を持っていました。それがある時、知り合いの方がサン・パウロに出るというので、馬を譲ってくれたのです。馬を引っ張ってくる時のあの父の喜びの姿っていうのは、僕は７つか８つぐらいでしたが、今でもまだ思い出すような気がします。あの当時は、物事があまり自由ではなかったという貧しさであって、もちろん大変な所もあったとは思いますが、苦労という苦労にはならないと思うのです。

僕らが子どもの頃は、ブラジルの小学校に通っていても、よくブラジルの人に侮辱されていました。僕たち年代の多くは、とても辛い経験しているかもしれません。しかし、１世の皆さんが勤勉で真面目に一生懸命働いた事によって、信頼や信用を築く事が出来たし、日本が戦争に負けながらも素晴らしく復興させたあの目覚ましい発展が、日本や日系人に対するブラジル人の概念をひっくり返した大きなポイントだったと思います。戦後当時と現在とではブラジル人の日本に対する見方というのは全然違いますし、今ではもう侮辱とかそういう事は絶対ありません。日系人に対する信用や信頼は、先輩である移住者の皆さんの努力や活躍ぶりによって築き上げられてきたと言えると思います。

３世、４世たちのアイデンティティー

沖縄を知る１世に育てられた私たち２世とは違い、３世や４世たちがウチナーンチュまたは日本人という意識を継続しているのかと聞かれれば、非常に難しい事だとは思います。家庭にもよると思いますが、うちの子供たちはずっとブラジルの沖縄県人会員ですし、沖縄県人会は唯一、サン・パウロの一番立派な競技場を借りて陸上大会をやることができます。沖縄県人会は40幾つかの支部がありますが、その支部対抗陸上大会というのを毎年やっていました。陸上大会の他にもバレーボール大会、サッカー大会など、沖縄県人会は他の県人会に比べて圧倒的に集まる事が多いのです。うちの子供は陸上やサッカー大会にも参加していたので、沖縄県人会の友達も結構いますし、沖縄県人会同士で付き合う機会に恵まれていると思います。

沖縄県人会は支部が沢山あるので、力を合わせて何か行動する時は非常に強いと思います。他の県人会は本部があっても支部はほとんど無い状態ではないかと思います。希望としては、このまま結束力を保ち続けてもらいたいです。日本の文化をはじめ、沖縄の文化など、伝統的な文化を活かしたり保ったり、心に持っているだけでも、その人の人格に現れてくるのではないかと思います。

ブラジル移民100周年の催しをするにあたって、連日マスメディアが日系関連の事を取り上げているのを見て、うちの子供たちも非常に誇りだと何回も何回も言ってくれています。だから子供たちも何らかの形でそういう気持ちが再認識できたのではないかと非常に嬉しく思っています。沖縄に対する一つの誇りというか、そういう気持ちはあるかと思います。

日系組織（県人会、日本人会）

父は現在、ビラ・プルデンテの日本人会に所属していて、時々大きな催しがある時には僕もいろいろ協力をしています。2ー30年ぐらい前までは「日本人会」という名称が大部分でしたが、その後は「日伯文化協会」という名前に変わってきました。リベルダーデや、ずっと北のベレンとか、リオ・デ・ジャネイロにも日伯文化協会連盟がありますし、パラナにもパラナ日伯文化連合会というものがあります。全伯で500ー600ぐらいあると思います。

現在、県人会連合会の会長を与儀昭雄（よぎあけお）さんがやっています。文化協会とはまた別に全体の組織としては、上原先生が会長を務めているブラジル日本文化福祉協会というのがあります。沖縄県人会の支部会館がありますが、近くに文化協会の支部会館もあります。ですから日本人会、いわゆる文化協会とは、その地域に住んでいる、またはその街に住んでいる日本人が作った会になるわけです。研修制度だとかいろんな情報をもらうためにやっぱり日本人として会員に加盟していた方が、いろいろ自分の活動をやりやすいので、だいたいの人は加盟していると思います。ブラジル日本文化協会の会員には個人会員もあり、企業の方が加入する団体（法人）会員もあります。

隣のオザスコという街には日本人が1,500人ぐらい住んでいて、そこの日本人会はかなりしっかりした団体ですが、沖縄県人会はそこにはないのです。沖縄の人があまりいないからです。ブラジルでは沖縄の人が集まっている所、集まっていない所というのは割とはっきりしていると思います。だいたいはカーザ・ベルジやビラ・カロン、僕らが住んでいる近くにもけっこう沖縄の人は固まって住んでいます。田舎の方からサン・パウロ市に出てくる時にはどうしても知っている人を頼ってくるから固まりやすいのでしょう。在留届けはほとんどみんな提出しますから、どの地域にどのくらいの人数が住んでいるかというのは領事館に行けば分かるとは思います。ビラ・カロンという所ではオキナワン・フェスティバルを開催しています。そういう事は「沖縄」のアピールやイメージアップに繋がっていると思います。

7）ブラジルからトミグスクの皆さんへ

ブラジルでの移民調査（2008年度実施）の報告展を開催するにあたり、ブラジルの関係者から豊見城市民へメッセージを寄せてもらいました。

大嶺　勉（ツトモ）　　字渡嘉敷系２世　　ブラジル豊見城市民会会長

豊見城市のみなさま、お元気のことでしょうか。

さて、今回の展示会開催に際しましてメッセージの依頼を受け「了解しました！」と回答いたしましたが、私はその後「何を書いたらよいだろうか、ブラジルで生まれた２世の自分にかけるだろうか」と思い迷い、そして悩みました。

まず、心よりパラベンス（おめでとう）と申し上げたいと思います。いろいろ考えていましたら、まだ幼いころ両親が豊見城のことを懐かしく話していた姿が思い浮かんできました。

今から、30数年前、豊見城高等学校が甲子園に出場されたとき、心の中で熱を込めて応援していたことも思い出しました。約７年前に金城豊明市長がご来泊されたとき、歓迎会においてそのご挨拶の通訳をさせていただきましたが、その時のご挨拶が非常に印象的であったことは申すまでもなく、いつも周辺に対するご配慮とお気遣いに頭が下がりました。ご挨拶の中で豊見城市の女性が長寿であるという話をお伺いし、本当に嬉しく思い、そのことが今でも私の記憶の中に鮮明に残っております。

父母も現在、それぞれ93歳と88歳ですが、これも伝統的に長寿を誇ってきた豊見城の影響を受けているためではないかと嬉しい限りです。

また、昨年、金城豊明市長の再度のご来泊に際しましては、豊見城市があらゆる面において日本全国でも素晴らしい成長と発展を遂げつつあるとの数々の明るい話題や近況を知り、豊見城市民会の一人として喜ばしく、そして誇りに思いました。

ブラジルで生まれた２世の私もそのように感じたものですから、豊見城市で生を受けられた１世の皆様方はより一層深い喜びと感動を受けられたことでしょう！

これからも末永く、地球の反対側に住む私たちトミグスクンチュ、特に１世の先輩の皆様方の心の支え・励まし・誇りの源泉となられますよう、豊見城市のますますのご発展と市民の皆様方のより一層のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

久保田　喜美子（きみこ）　　字伊良波系　戦後移民１世　　豊見城市民会前会長

豊見城市民会の集まりでは、毎回豊見城市のことを話します。時々、新しい人が顔を見せると「ヤーヤ、トミグスクンチュヤタンバーイ？（あなたも豊見城出身だったの？）」と盛り上がるんですよ。日本語を話せる子弟が少なくなってきているので、豊見城市との交流を希望しています。

赤嶺　尚由（ひさよし）　　字渡嘉敷系　戦後移民１世　　サン・パウロ市調査の案内・通訳・話者紹介

移民100周年を迎えて、当然と言えば当然の現象ですが、戦前に移住した１世移住者の高齢化が特に目立ちます。今回の調査は時期的に非常に良く、この機会を逃していたら、きっと残念がる結果になっていたことでしょう。

玉城 ジョルゼ 淀二（ジョージ） カンポ・グランデ市沖縄県人会長

調査を行ってくれることに対し、豊見城市へお礼を申し上げたいと思います。

私はカンポ・グランデ市沖縄県人会という組織が、沖縄の文化を子ども達に伝え、広げていく一つの道になっていると信じています。ブラジル移民100周年を通じて、沖縄の文化を大切にしていかないといけない、そしてその文化が今後も続いて欲しいと願っております。

カンポ・グランデ市には沖縄県出身移民が非常に多く、名護市、大里村に次いで豊見城市出身者が多い地域です。ですから故郷でもある豊見城市と姉妹提携を行い、文化の交流を行いたいと思っています。

金城 幸吉（こうきち） 字真玉橋出身１世 カンポ・グランデ市での案内・通訳

今回、案内・通訳という形で故郷の豊見城市の移民調査へ協力できることを、本当に嬉しく思っています。良い調査を行えるよう全力を尽くします。豊見城市民の方々に、真玉橋の金城はブラジルで元気に頑張っていると伝えて下さい。

勝連 ひろし 名護市系出身 カンポ・グランデ市調査案内・通訳・話者紹介

豊見城出身者は大人しい人が多い。だけど、すごい人が多い。こんな時間をかけて調査をしてくれた豊見城市はすごいと思う。自分は旧羽地村出身だが、豊見城の調査に関わることができて、大変嬉しく思っている。

ツネオ・シンザト 名護市系２世

豊見城市からカンポ・グランデ市まで調査に来て下さって、本当にありがたく感じています。

伝えたいことがたくさんありますが、日本語が話せないのでとても残念です。カンポ・グランデ市と沖縄県がもっと繋がることを願っています。

金城 ジョン まさひろ 字真玉橋系２世

いつまでもウチナーンチュ。

豊見城系３世の女性

沖縄に住む若い人に、もっと方言を大切にしてほしい。

須藤 英二 群馬県出身１世

他府県出身の私からみると、沖縄県は移民した方々の歴史を記録したいと、このように現地にまで足を運び取材してくれる。そして歴史に残してくれる。本当に羨ましく思います。沖縄県人の繋がりの強さは非常に強く、何かあればみんな集まってくる。調査へ協力したいので、何かあればぜひ声をかけてください。

赤嶺 マウロ 赤嶺新野栄（字真玉橋出身１世）の孫、３世

３世である私たちの時代ももう終わりが近づいています。祖父が行ったことを残すすべがないと心配しているときに、祖父の故郷である豊見城市から調査に来てくれた。本当にありがたいです。自分たちの子どもに祖父の話をしても、一人づつ席をはずして、耳を貸してくれない。

そういう状態ですから、自分たちの祖先のことを語り継ぐことが私たちにはできないのです。

そういうときに、豊見城市が祖父の歴史を、そして移民の歴史を残すために話を聞かせてもらえないかと訪ねて来てくれた。祖父の歴史が故郷である豊見城市に残ってくれれば、次の世代へと受け継がれていくと思っています。だから、今回の調査をありがたく思っています。

赤嶺　千代子　　赤嶺新野栄（字真玉橋出身1世）の孫、３世

私たちは、祖父の記録が載った本が出来上がるのを、大変楽しみにしています。本が出来ましたら、祖父のお墓に供えて報告したいと思っています。

城間　愛子　　赤嶺新野栄（字真玉橋出身１世）の孫、３世

祖父、赤嶺新野栄について記憶している限りの全てのことをお話したい（200㎞離れた自宅から駆けつけて）。

テレーザ・友寄　　那覇市系２世

私の父は那覇市出身ですが、豊見城市が調査に来ると聞いてホテルまで会いに来ました。私の父に関する資料をぜひ、父の故郷・沖縄で保存してくれませんか。

サントスで声をかけてきたブラジル人

この地域は、沖縄の人が頑張ってここまで大きな街になりました。あなたが着ているＴシャツに「Okinawa」と書いてあったので、沖縄人かと思い声をかけました。沖縄人には本当に感謝しています。

仲里　勝連　シモネ　　名護市系３世

沖縄のことを、いつも想っています。

２．ボリビア

１）ボリビア多民族国

ボリビア多民族国は日本の約３倍、世界でも28番目に広い面積を持つ国です。2009（平成21）年３月に国名を「ボリビア共和国」から「ボリビア多民族国」へ変更しました。

使用言語は主にスペイン語で、人口は約1,043万人（2010年現在）、首都のラパスは標高約3,400ｍという世界で最も高い場所にあります（憲法上の首都はスクレ）。

南米大陸のほぼ中央に位置する海との出入り口を持たない内陸国で、国土の３分の１をアンデス山脈が占めています。

ボリビア国内は９つの州に分かれており、最も大きい面積を持つのがサンタ・クルス県です。サンタ・クルス県にはサンファン、コロニア・オキナワといった日本人移住地があり、現在も多くの日系人が住んでいます。

外務省によるとボリビアへ移住した日系人は推定で約11,500人となっています。

『ボリビア・コロニア沖縄　入植25周年誌』より

２）コロニア・オキナワ（オキナワ村）

第２次世界大戦前からボリビアには沖縄県出身移民が近隣国より移動してきて住んでいました。彼らは沖縄戦の状況を知り、土地や家を失った沖縄県人を救おうと考え、ボリビアで受け入れるための準備を始めます。

ボリビア政府や琉球政府へ働きかけ、1954（昭和29）年に400人の沖縄県出身の移民を受け入れます。しかし、移民を受け入れた土地が農業に適さないことや原因不明の熱病（うるま病）が発生したことから、新しい移住地を求めて移動します。

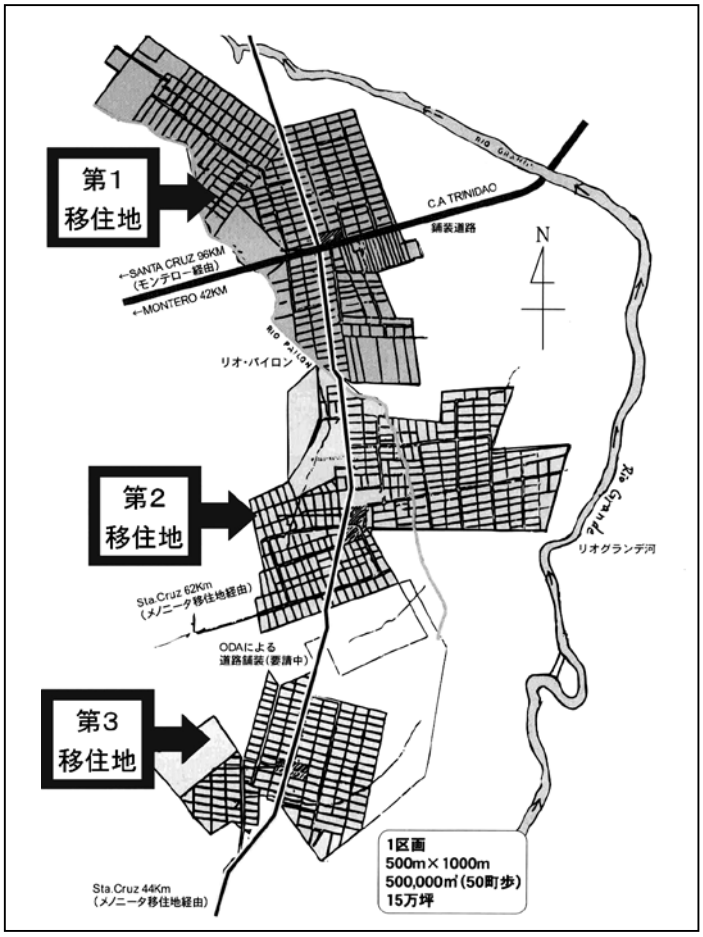
適した土地を求めてたどり着いたのが、現在「第１移住地」と呼ばれている地域です。第１移住地では、密林を切り開いて村作りを進めていきました。

沖縄県から次々と渡ってくる移民を受け入れるため「第２移住地」、「第３移住地」と範囲を広げます。1964（昭和39）年までに3,229人を受け入れました。

このうち豊見城出身者が40人含まれていました。たび重なる洪水や干ばつにより、隣国への転住、または沖縄へ帰郷した人もいますが、比嘉家（字嘉数）、仲村渠家（字宜保）は今でも在住しています。

1998（平成10）年４月18日にはボリビア政府により第１、第２、第３の３つの移住地と周辺の集落を統合した「オキナワ村（Colonia Okinawa)」が承認されました。コロニア・オキナワは小麦の生産で有名で、2002（平成14）年にはボリビア政府により「ボリビア小麦の首都（La Capital Triguera de Bolivia)」に認定されています。

コロニア・オキナワ移住地の地図



『希望の大地　−ボリビアに期待と夢を−』より

コロニア・オキナワの入り口

コロニア・オキナワの入り口です。ボリビアへの入植50周年を記念し、日本ボリビア協会によって建てられました。裏側には､｢Feliz Viaje よい旅を！行ってらっしゃい。｣と書かれています。

リオ・グランデ川

コロニア・オキナワの側を流れる川で、スペイン語で「大きな川」という意味です。２月の雨期になると、増水により決壊、コロニア・オキナワまで浸水することがあります。

1968(昭和43)年には、リオ・グランデ川の氾濫により家屋や農地が水没し､大きな被害を受けました。

現在は、村内まで浸水しないよう堤防工事を進めていますが、リオ・グランデ川はコロニア・オキナワの大きな問題となっています。

オキナワ第一日ボ学校

1987(昭和62)年３月、第１移住地に開校しました。午前中はスペイン語、午後は日本語の授業を行っています。１年生から８年生まで、生徒数は83人です(2008年現在)。

クラブ活動には、エイサーや三線も取り入れています。

豊見城市からの教科書

2007（平成19）年、豊見城市教育委員会は市民から集めた452冊の教科書をオキナワ第一日ボ校へ提供しました。日本語の授業に使うための教科書です。

この教科書は現在、図書室で管理され、多くの生徒のみなさんに利用されています。

ゲートボール愛好会

第２移住地での練習風景です。第１移住地の高齢者がゲートボールを始めたことがきっかけとなり、第２、第３移住地でも行われるようになりました。

１年に４回の大会のほか、近隣国との国際試合にも参加しています。

ボリビア沖縄県人会館

ボリビアに在住している沖縄県人をまとめる組織として1987(昭和62)年７月11日に、創立されました。

約6,000人の沖縄県系人のうち、約1,400人が加入しています(2004年現在)。

みうら商店

ボリビア沖縄県人会の事務所が入っている建物の１階にある商店です。しょう油や味噌、お菓子のほかに豆腐、巻き寿司、アシティビチなども販売しています。

またコロニア・オキナワ内にある乳製品加工工場の商品「OKI MILK(オキミルク)」も販売しています。

オキナワボリビア歴史資料館

コロニア・オキナワへの入植50周年記念事業の一環として、2004（平成16）年８月14日に開館しました。

村づくりに使用した農具、生活用品などコロニア・オキナワの歴史的資料が約2,000点展示されています。

初代館長を務めたのは、比嘉次雄（つぎお）氏(字嘉数出身)です。

３）証言

ボリビアでは４人の方から聞き取り調査を行いました。ここでは２人の方の証言を紹介します。

仲村渠（なかんだかり）　信子（のぶこ）　　戦後移民１世　1932年生　字宜保出身／オキナワ第１コロニア在

調査日：2008（平成20)年９月20日(土)　場所：仲村渠信子氏宅
聴　取：町田宗博、赤嶺みゆき　　協力：比嘉次雄
反訳、文：比嘉香織

仲村渠信子さんは1932（昭和７）年９月10日に字宜保にて金城清一とカマドの次女として生まれる。屋号は座安殿内（ジャートゥンチ)。長男のセイコウ（故人)、長女のハツエの３人兄弟である。宜保に寄留してきた那覇市大嶺出身の仲村渠勝彦と結婚し、24歳でボリビアに渡航。移民当初の原生林が生い茂る配分地を夫婦二人で開拓し、現在は息子がその土地で農業を営んでいる。開拓当初の苦労やリオ・グランデ川の洪水被害などについて話を聞きました。

両親と兄弟　　父の名は金城清一、母はカマドといいます。父の生年はわかりませんが、病気を患っていて45歳で豊見城の字宜保で亡くなりました。10・10空襲前のことだったと思います。母は私が４歳の時に亡くなりました。

父のヤーヌナー（屋号）はジャートゥンチ（座安殿内）だと聞きました。兄弟姉妹は３人で、私は一番下です。姉のハツエは豊見城の宜保で元気にしています。

夫と子ども　　主人は仲村渠勝彦といいます。1930（昭和５）年３月13日生まれで、那覇市ウフンミの出身です。10・10空襲が終わった後だったと思いますが、宜保に寄留してきました。夫は五男です。その兄弟のうち、三男はサン・パウロ、次男と六男は沖縄にいて、四男はもう亡くなりました。

私たち夫婦は７人の子供をもうけました。長男の勝夫だけは沖縄で生まれて、後はみなボリビアで生まれました。

移民当初　　沖縄で結婚した後、1957（昭和32）年の10月15日に出発して正月にはボリビアに着きました。移民した当時、私は24歳でした。夫と長男の勝夫の３人で船に乗りました。次女は沖縄から身ごもっていたので、ここに来てすぐ生まれました。

来たばかりの頃は、山を切り開くのに相当苦労しました。主人が鉄砲を買ってからは、毎日狩りをしていたので肉はたくさんありましたが、水が無いのです。雨が降るとその雨水を貯めて、沸かして飲みました。もう相当苦労しましたね。毎日泣いている私に主人が「頑張りなさい」と励ましてくれましたが、20代の若い時に沖縄の親元を離れて「すぐ帰ってきますよ」ってボリビアに来たのですが、どうする事も出来ませんでした。今でこそ牧場とか畑になっていますが、来た当初はとても大きな原生林があって、そこを苦労して開拓しました。もうその苦労も忘れましたが、当時の話はあまりしたくないですよ。ボリビアに来た頃、人からカメラを借りて撮った写真もありますが、あの時の写真を見たら恥ずかしいし、惨めな気持ちになってしまいます。

今では耕している畑の広さは150ヘクタールです。冬作の麦を作っていて､夏作ではトウモロコシや米（水稲)、主に大豆を作っています。自分たちで食べる分も自分たちで作っています。

リオ・グランデ川の洪水　　リオ・グランデ川の近くに畑があって、今年は洪水で凄い被害を受けました。ここは地形的に低い所らしくて、今住んでいるこの辺も大変なダメージを受けました。雨水だけではそんなに被害はありませんが、川が氾濫したらもう大変な事になります。今は一生懸命、洪水対策をやってはいますが、今はこっち、次はあっちって直しても間に合いません。耕地の周辺を高くしているので、少ない水だったら対策になるでしょうが、今年のような水量がきたらもたないと思います。洪水で水が入ってきたら借金ばかりが膨らんでいきます。主人が元気な時にはJICAから借りましたが、今も返しきれずに、この前も請求が来ていました。水が入ったらみんな何もかも無くなってしまって借金だらけです。今のところ援助なんてものはありません。

ここは移住地でいったら北の方になりますが、一番北にある畑までは、ここから10kmくらい先になります。しかし今は誰も住んでいません。北に行けば行く程、土地が下がっているので、南の高い区域からの水も全部こっちに流れてきてしまうのです。こんな土地のせいもあるのでしょうが、子どもや孫が学校に行きだしたら通学が大変になってきますので、みんな中央の方に出て行ってしまいます。

「洪水対策」について／比嘉次雄氏の証言　　JICAは堤防建設から引き揚げてしまいましたが、今はボリビア国と沖縄県から40ー60％の助成金が出て、20kmほどの堤防は作っています。ですが、私たちが管理している地域は20kmだけでなく70kmはあります。今年の洪水でも３ヵ所ほど壊れてしまいました。去年や今年みたいに水が多かったら今後もまだまだ被害を受ける心配があります。雨が降るのは良いけど、上流で降った雨水が氾濫するのが怖いです。自然の災害が一番大変ですね。

最近は地球温暖化のせいか、雨が多くなっているようです。この地域だけが多いわけではなく、ボリビアの三角地帯で多く降るようになってます。その水が全部こっちに流れてきてしまうのです。水が来た時は、牛は歩いて移動出来ますが、餌になる牧草とか食糧の大豆などの作物は植えたら水没して枯れてしまいます。

1968（昭和43）年の洪水は、道や床下まで水が入ってきて一番大変でした。今の家は土を高く盛って建てていますが、この土を持ってくるのがまた大変な作業です。ここは地形的に平らで崩す山がないので穴を掘って土を確保します。また、この辺は石っころ一つありません。遠い所から砂利を買ったり、石を持ってこなければなりません。時には100km以上も遠い所から持ってくるので、建築する際は費用が高くなってしまいます。しかし農地としては最高ですよ、この地区は何十年も肥料なしで農業が出来るくらい良い土地なのです。

買い物とデイサービス　　ここから店までは10kmの距離です。病院に行く時にはデイサービスの車があるので、病院に行くついでに買い物にも行きます。デイサービスは１ヶ月に２回、だいたい木曜日に第１ー第３移住地までの人が文化会館に集まってやっています。予算は日ボ協会から出ているそうです。沖縄からJICAの助成で、介護保険の専門家の宮城さんという方がいらしていて、デイサービスの指導をしています。去年は玉城マサクニさんでした。

ブラジルのカンポ・グランデにはいっぱい遊びに行きましたよ。うちのシマンチュ（宇宜保出身者）は誰もいませんでしたが、タケーシ（字高安）とかヌーファ（字饒波）の人がいました。みんな同級生でした。

比嘉（ひが）　次雄（つぎお）　　戦後移民１世　1953年生　字嘉数出身／オキナワ第１コロニア在

調査日時：2006年10月５日　　場所：豊見城市役所

聴　　取：与那嶺豊、赤嶺みゆき　　反訳：大城恵美、赤嶺みゆき

文：鳥山やよい

比嘉次雄氏は1953（昭和28）年２月６日、豊見城村字嘉数にて、父・比嘉永祥、母・ハツエの５人兄弟の４番目、次男として誕生する。兄弟は上から長女・安子、長男・永吉、次女・智子、次男・次雄、三女・昭子（故人）である。一家６人はボリビアへの第10次移民に応募、1960（昭和35）年４月19日にボイスベン号で渡航した。その当時の模様を聞きました。

家族　　私たち家族はボリビアへの第10次移民（1960年４月19日渡航）で、乗った船はボイスベン号でした。私の父は比嘉永祥、母はハツエといいます。兄弟は４人、私は一番下の次男です。当時７才でした。僕の下にもう一人妹の昭子がいたのですが、幼い時に亡くなったので、実際は僕が一番下のようなものでした。両親は共に豊見城村の出身で、父は嘉数、母は真玉橋でした。

ボリビアへ行った最初の時期に学校が茅葺きで建てられ、現地の先生が来てました。スペイン語の先生です。だから兄弟全員、年が違うのにみな１年生でした。でも、兄や姉たちは学校には行かなくなってました。僕は７才だったので、木を切り倒すなどという開拓の仕事には使えないからとの理由だと思うのですが、ずっと学校へは通えました。また一番下だからフンデーして（甘えて）勉強できたと思います。

移住地　　学校は僕らの家から５キロの場所にありました。だから馬で通いました、一人一頭、裸馬に乗って行くのです。帰りは友達どうしで、どの馬が早いかを競争しました。現地のスペイン語は自然に覚えました。でも家では日本語というか沖縄の方言ですから、僕らと同じ世代は沖縄の方言もわかります。当時の学校には大勢の生徒がいました。一気に増えた時期があったのですね。計画移民でしたからどんどん人が増えていきました。でも結局、どうってことない、沖縄戦で失業者がいっぱいいたから、あんな所（ボリビア）に連れていかれたようなものではないでしょうか。

僕らの生活は、行った当初は苦しい時期だったんですね、みんなそうでした。とっても苦しい・・・、それで僕ら子供にも役割がありました。学校には通わせてもらって農作業はしなくていいからって、そのかわり水汲みが僕に与えられた仕事でした。10才ほどの年齢の子供たちはみなそうでした。この年齢の子は山を切り開くために大木を切り倒すなんて事には中途半端な年齢なんですね、だから水汲みと狩りが仕事でした。

水汲み　　僕らのいた所は水がなかったので、最初は雨が降ったらドラム缶に水を溜めて、ボウフラ（蚊の幼虫）がわいているのを避けて使ってました。そういうことが４、５年続いた後は井戸でした。井戸を10メートルほど掘ると塩水がでて飲めません、だけどボーリングして50メートル、100メートルも掘ると、もの凄くきれいな水がでました。オキナワ移住地の下にはきれいな水がありましたよ。移住地は１号線、２号線って区分けされていて、それを僕らは「ゴーセン」と言ってましたが、そのゴーセン内に井戸は一つでした。その井戸は僕らの家から３キロの場所にありました。

僕らは毎日、５キロの道を学校から馬で帰ってくるでしょ、それから馬に荷車をつけてドラム缶を二つ乗っけて３キロ先の井戸まで水汲みに行きます。その井戸も蛇口をひねると水が出るようにはなってません。ポンプを漕いだら水がでるようなもので、ドラム缶二つに水をいっぱいにして、また３キロの道を帰るのです。ドラム缶の水は、一つは翌日のお母さんの水、料理と飲み水です。もう一つは牛にあげるやつです。上等な

水でしたよ。牛も乾いているから一日中水を飲みます。入れても入れても飲む。それでやっと夕飯を食べる権利があるって感じでした。学校に行って遊んで遅くなっても水汲みには行かないといけない、いつも夜までかかりました。水は毎日いるでしょ、学校の休みの日は朝から水を汲んでお母さんにあげて、それから鉄砲もって山に狩りに行くのです。

狩り　食べる物がないので、12才の頃から散弾銃を与えられて山へ猟に行きました。目の前に出てきた動物を撃つのです。楽しみで撃つのではなく、動物を撃ち殺すのです。食べるためです。殺したものはお母さんに持っていきました。米を荒しにくる山鳩とか、キジ、鹿も捕りました。鹿が捕れたら１週間分の家族の食糧ができました。冷蔵庫なんてないからマース（塩）づけにして保存しました。ずっとやってると狩りの腕前も上手になって、もう僕らの目の前に出てきた動物は最後という感じでした。鉄砲の弾も、薬莢に火薬をつめるやり方を教わって自分らで作りました。

狩りに行くのは、家で飼ってる鶏をつぶさずにすむからです。動物はいろいろいましたよ、山といってもジャングル、本当にジャングルなの。たまに迷ってしまうことがあって、親が迎えにきた事もありました。そういう生活でした。猟は家族の中では僕一人の仕事で、姉はやっぱり女だからってことで猟には行きませんでしたね。同じ年齢の子らはみなやってました。もっと年齢がいったら力仕事ができるということで担ぐ仕事をやらされました。そういう労働をしないで良い物を食べていたら、もっと背が大きくなっていただろうなと思います。

食事　最初の頃、食事は肉でしたね。狩猟した肉です。牛の肉は手に入れられません、値段は高くないと思うのですが、そんなお金もない、とても貧しい生活でした。でも沖縄にある野菜の種はみな持って行きました。沖縄のフーチバー、オクラ、ナーベーラー、ゴーヤーとか。それを植えて収穫するまで時間がかかるでしょ、だから最初の頃は狩りでとった肉を食べていました。

気候　ウージ（サトウキビ）を栽培しました。日本の沖縄でもできますが、ボリビアのオキナワでもできるのです。気候はにてますが、雨は雨期にしか降りません。10月から翌年の２月、３月までが雨期の季節です。そして５月からは乾期に入って雨がまったく降らないのです。もうこの世の中、雨が絶対に降らないのではないかと思うぐらいです。しかし住めば都で50年もして、今は良い所ってことになりつつありますね。

現在のオキナワ移住地　「オキナワようこそ、めんそーれ」と書いてあるアーチは僕らのオキナワ移住地の入口にたっています。オキナワ移住地は第１、第２、第３とあって、第１移住地がいっぱいになったので第２､第３と開拓地を拡げていきました。沖縄本島がすっぽり入るぐらいはありますよ。結構大きいでしょ。

日ボ学校があって、スペイン語と日本語のバイリンガルでの教育です。沖縄のエイサー、三線なども部活動で教えてます。５年生以上の子はみな三線が弾けます。琉球国祭り太鼓の支部もありますね。

僕は沖縄県人会の会長もやってますが、オキナワ移住地に住んでいる人は全員が会員です。移住地の約900人、サンタクルス市内の約500人です。会の行事は各自でやります、移住地は移住地で市内は市内で。サンタクルス市の県人会には確か琉球舞踊愛好会があって、おばあさん達が活動していたと思います。

僕が会長としてやるのは、それぞれの代表が集まる理事会をまとめることです。ボリビア沖縄県人会として直接やる行事に９月の敬老会があります。トーカチを過ぎたおじぃ、おばぁたちに金一封をあげてお祝いしますね。もちろん、みな１世の方で、開拓に一生を費やして努力してきた方たちです。先輩たちを大切にする意味で敬老会はちゃんとやります。

他には読谷村人会とか金武とか、恩納村とかありますが、僕らの豊見城は１番少ないです。２家族しかいないし、住んでる所も２軒隣りですが、隣りっていっても一番近い隣が20キロぐらいあります。だからトミグスクンチュでの会というのはとりたててやっていません。

僕らは100キロ離れているサンタクルスの街まで毎日、あるいは１日に２回出かけるときもあります。100キロの距離も、時間にすると１時間半以内では着きますから。移住地の中にも商店はありますが、機械の部品とか手に入らないものもあるので、サンタクルス市内まで行くのです。日本食が食べたいと思ったときも市内にでます。移住地の他のみなさんも１週間に１回は行ってるはずですよ。

沖縄の食材はほとんど手に入ります。ゴーヤーも豆腐チャンプルーも食べられます。でもそうなったのはここ10年です。日本の食材は梅干しとか醤油とか手に入りますが、ほとんどがブラジル産です。日本産は高いですけど、お茶漬けや納豆は日本製がいいですね。サンタクルス市内にはCAICOが直営しているスーパーがあるのです。

CAICO（カイコ）　カイコニュースの「CAICO」というのはCooperativa Agropecuaria Integral Colonias Okinawa Ltdaの略で、コロニア沖縄農牧総合協同組合のことです。農協、経済団体です。この理事役員会が最近からスペイン語なんですね。移住して50年も過ぎて１世から世代交代しまして、それで役員会はスペイン語なのです。この総会資料も今までは日本語、スペイン語と両方で書いてましたが、今はスペイン語だけになりました。

移住して得たもの　豊見城の関係者は現在２家族です。前はもっといましたが、他の兄弟はブラジル、アルゼンチンに行ったり、沖縄に帰ったりです。それで正解だったのかもしれないし・・・どうだったのか分からないですね。移住地に残ったのは、それでも開拓するんだと夢に満ちた人、帰りたくても帰る旅費がなかった人です。またアルゼンチンやブラジルと隣国に再移住して、そして沖縄に帰った人。今現在残っているのは220世帯ぐらいですかね。

でも土地の面積は同じですよ。移った人たちが開拓した土地を残る人に安く売ったからです。だから残ってる人が持ってる土地は一人平均200ー300ヘクタール、中には500、1000、2000ヘクタールの広大な土地を持ってる人もいます。ボリビアでは地平線から太陽が上がって地平線に落ちるんですよ。それぐらい大きい。僕らは小さい頃は海がみたいと思ってました。沖縄は海から太陽が上がるでしょ、それがとても羨ましかったし、今でも羨ましいです。

移住した最初はとても夢にあふれて行きましたが、現実はそうじゃなかったんですね。水もない、道もない、何もない所、そんなもんでした。開拓移民だから開拓されている所に入れるわけないですよね、ボリビア人が開拓できない場所だから入れたのです。だから殖民とか開拓っていうのは、切り開いて今のようになるのに何十年とかかるんですよね。僕らが50年かけて移住地で得たものは、ボリビアの国からの信頼です。信頼というのは簡単に手に入るものではないのですよ。とても２、３年では手に入らない、ボリビアの沖縄移住地は自治権を得ました。ボリビアだけでなく他の移民地でもそうでしょうけど、たくさんの国の人から信頼を得るということは時間がかかるのです。

３．ハワイ

ハワイ調査について

ハワイ調査は2010（平成22）年８月29日～10月３日の期間を赤嶺みゆき、鳥山やよい（ともに編集事務局員）で行ない、調査はオアフ、ハワイ、マウイ、カウアイの４島を回りました。

日本からハワイへの移民は1885（明治18）年にはじまり、現地での日系社会は約100年を経ています。そして沖縄移民についても現地の博物館や多くの書籍によって紹介されています。それらの文献資料は、ハワイ大学マノア校のハミルトン図書館、沖縄センター、HUOAの拠点であるハワイ沖縄センターより提供、もしくは購入で収集しました。

豊見城からハワイへは約760人が移民してますが、１世はすでになく、２世～３世を調査対象とし、聞き取り調査を行いました。調査対象者の選定は事前に行っていた豊見城村人会へのアンケートと『来布五十年記念沖縄県人写真帳』に載っている豊見城の関係者を、豊見城村人会とハワイ沖縄連合会を通じて消息をつかみ、調査を行いました。と同時に、関連する文書、手紙、写真、映像などの資料収集も行いました。

日程及び用務経過

オアフ島

８月29日～９月13日、10月２日

調査人数　30人

調査した場所　ハワイ大学ハミルトン図書館、ハワイ大学沖縄研究センター、パールハーバー、ハワイ沖縄連合会、プランテーションビレッジ、パンチボール、マキキ日本人墓地、日本文化センター、442・100大隊記念館、マノア日本語学校、マカレー東本願寺跡、ビショップ･ミュージアム、アラモアナ公園、當山久三のお墓

ハワイ島

９月14日～９月20日

調査人数　11人

調査した場所　コーヒー工場、ハナゴホテルの食堂、内田コーヒー園、日本料理店てしま、コナ本願寺、日本人墓地（70年代まで組合管理）、コナ・イミンセンター、ハビィ浄土ミッション（県人会の新年会場）、100大隊以降の町からの出征兵士の碑、長嶺龜の家、コハラ製糖工場の船着き場、リリオカラニ公園、ヒロの朝市、エディ・K・ヒガのお墓、ピホヌア会館、ツナミ博物館

マウイ島

９月21日～26日

調査人数　11人

調査した場所　マウイ沖縄カルチャーセンター、オールド県人会館、タロ芋畑、プネネ製糖工場、プネネプランテーション跡、シュガーミュージアム、オロワルプ

ランテーション跡、オロワルのお墓、ラハイナ本願寺、パイオニア製糖工場跡、ラハイナミュージアム、ナガミネ・フォト、日系人部隊の記念日特別プログラム

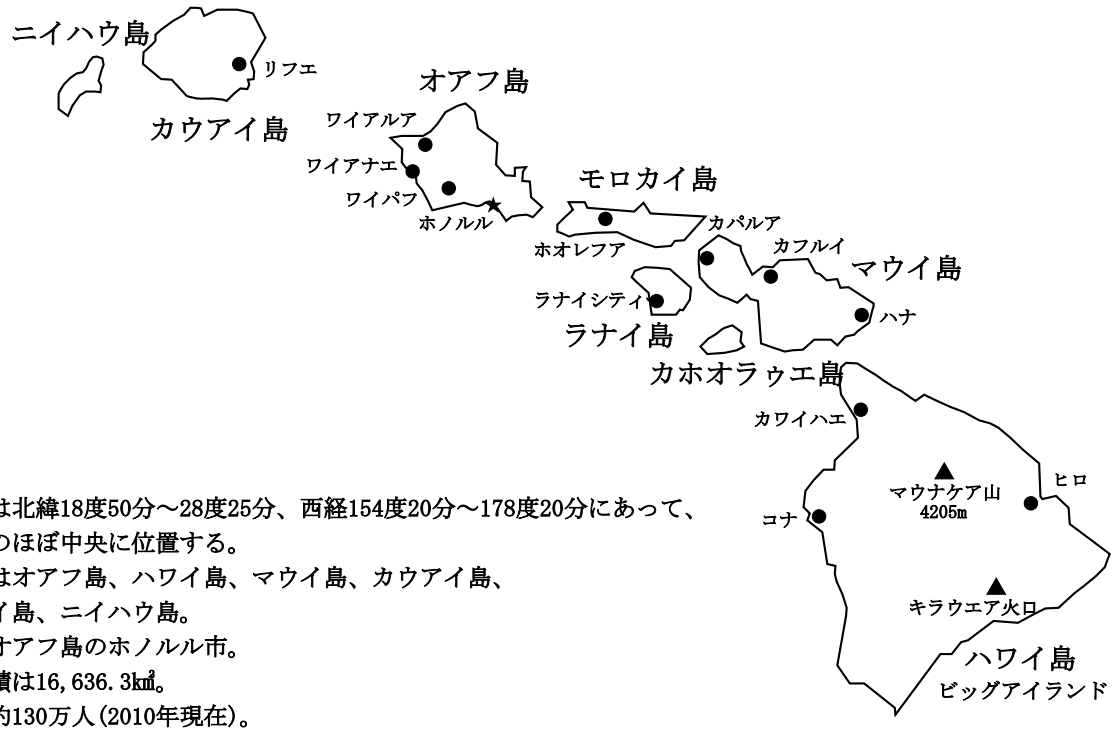
カウアイ島

９月27日～10月２日

調査人数　12人

調査した場所　マモル･カネシロの生家（養豚場跡)､コロア製糖工場跡､コロアヒストリーセンター、パイン農場跡地、ケカハ・プランテーション跡、オールド県人会館、ケアリア日本人墓地、ケアリア製糖工場跡、スポールディング氏の記念碑、リフエ製糖工場跡、プランテーション・トレイン、マモル・カネシロの豚舎、日本人墓地（組合管理）

アメリカ合衆国ハワイ州地図　-Hawaii-



・ハワイは北緯18度50分～28度25分、西経154度20分～178度20分にあって、太平洋のほぼ中央に位置する。
・主な島はオアフ島、ハワイ島、マウイ島、カウアイ島、モロカイ島、ニイハウ島。
・州都はオアフ島のホノルル市。
・州の面積は16,636.3㎢。
・人口は約130万人(2010年現在)。
・公用語はハワイ語と英語。

１）ハワイへ移民

1779年、ハワイがカメハメハ王国だった頃にハワイ島のコナ海岸へイギリスの探検家、キャプテン・クックが来島しました。ハワイはそのことをきっかけに世界に知られるようになります。そして19世紀初頭に米国からキリスト教の伝道師がハワイへ来島しますが、その子孫が広大な土地を所有してはじめたのがプランテーション農業と牧畜でした。

プランテーションの作物は主にサトウキビ、パイナップル、コーヒー、オレンジで、後にマカデミアンナッツやタロイモなどの栽培も行われました。そのプランテーションの労働者としてハワイには各国からの移民が入ってきました。ポルトガル、中国、日本（沖縄）、フィリピン、朝鮮などです。それは現在のハワイの多文化社会につながっています。

日本からハワイへの本格的な移民は1885（明治18）年の「官約移民」にはじまります。そして翌年には日本とハワイ王国間に「日本ハワイ渡航条約」が結ばれました。1898（明治31）年にハワイが米国へ併合されても移民は続き、ときに制限されることもありましたが、1933（昭和８）年まで続きました。

沖縄県からハワイへの移民は金武村出身の當山久三の尽力で実現しました。1900（明治33）年ホノルル港に27人が到着したのが最初です。その３年後の1903（明治36）年に沖縄県では土地整理事業が終わります。私有財産制となり税が物納から金納にかわりましたが、経済の変化になじめず困窮する人々が多くなりました。そのことが移民を多く出す理由の一つとなりました。

豊見城からハワイへの移民は1904（明治37）年に外間喜展（ほかまきてん）（字真玉橋）が渡ったのが最初です。それ以後1939（昭和14）年までに約760人が渡航しました。

▲ハワイ沖縄連合会会館前に建つ當山久三の銅像

▲栽培されていたサトウキビ
（プランテーション・ビレッジにて）

サトウキビ

コロア製糖工場跡（カウアイ島コロア）

1835年、ハワイで一番最初に建てられた製糖工場です。

現在は公園になっていて、煙突跡が残っています。

リフエ製糖工場跡（カウアイ島リフエ）

リフエ製糖工場から伸びるキビ運搬用の線路跡です。

長嶺亀（かめ）　字豊見城出身　1世

（写真左）ハワイ島コハラに住んでいた長嶺亀氏とその家族です。

（写真右）長嶺亀氏と家族が住んでいたと思われる場所です（現在、ここには別の方が住んでいます）。

コハラ製糖工場跡（ハワイ島コハラ）

コハラ製糖工場跡の側にある船着き場（写真左）と駅（写真右）です。ここから、キビが運搬されました。

プランテーション・ハウス

ハワイ島のピホヌア・キャンプ跡に残っているプランテーション・ハウスです。プランテーション労働者の一般的な家で、高床式になっています。

プウネネ製糖工場（マウイ島プウネネ）

現在､ハワイ州でただひとつ稼働している製糖工場です。

パイン農場の跡（カウアイ島カラヘオ）

かつては眼下に広がる風景がすべてパイン畑だったそうです。

パイン工場の様子（マウイ島ラハイナ）

パイン工場での作業風景です。

長嶺亀助（かめすけ）　1898年生　字豊見城出身　1世

長嶺亀助氏（1898-1971年没、享年73才）は、ハワイ島コナでコーヒー農園をやっていました。花嫁になった娘のミツエ・タニヤマさんをエスコートしている写真です。

ミツエ・タニヤマ　字豊見城系　2世

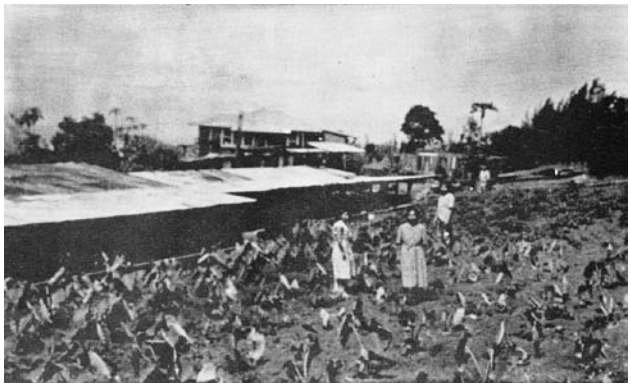
長嶺亀助氏の娘、ミツエ・タニヤマさんは「コーヒーと野菜を栽培して、子どもたちに教育をほどこしてくれた父に感謝しています」と話してくれました。

當間加那（かな）　1889年生　字保栄茂出身　1世

ハワイ島ホノカアで養豚業を営んでいた當間加那氏とその家族です。

當間加那（かな）一家のタロ畑

1000坪の畑に豚の飼料用のイモやタロイモを植え付けていました。



2）沖縄人コミュニティーのはじまり

ハワイでの日系人移民社会の中では言語や文化の違いから、沖縄系移民は差別されていました。移民がはじまった当初から日系人移民が持ち込んだお寺、神社などの宗教施設（相互扶助や人々の拠り所とされた）にも、沖縄系移民は入れてもらえませんでした。そのようなことから沖縄人は自分たちだけでお寺をつくりました。

ホノルルにある浄土真宗西本願寺派の慈光園も沖縄人が集まり作ったお寺で、沖縄県人連合会の活動拠点となった所でした。慈光園の理事には県人会長も名を連ね、現在でも集会室には歴代の県人会長の顔写真が飾られているのをみることができます。

またマウイ島パイヤにある臨済禅ミッションも沖縄人が作ったものでした。豊見城村字上田出身の大城強司が住職をしていた1950（昭和25）年当時には、そこに住んでいた沖縄人とともにお寺を建立しました。それは沖縄人独自のコミュニティーのはじまりの一例ともいえるでしょう。

しかし、一方ではプランテーション・キャンプごとの互助組織である組合／KUMIAIもありました。これはキャンプに住む沖縄人も含めた日系人全体の組織で、ハワイ島やカウアイ島では日本人墓地を組合で管理しているところもあります。

▲慈光園の集会室に飾られている沖縄県人連合会長（1968 ー 1972 在）・具志保男（字豊見城系、帰米２世）の肖像

▲慈光園の玄関前に建つ「ハワイ沖縄移民六十五周年記念之碑 四海兄弟」の石碑

トートーメー

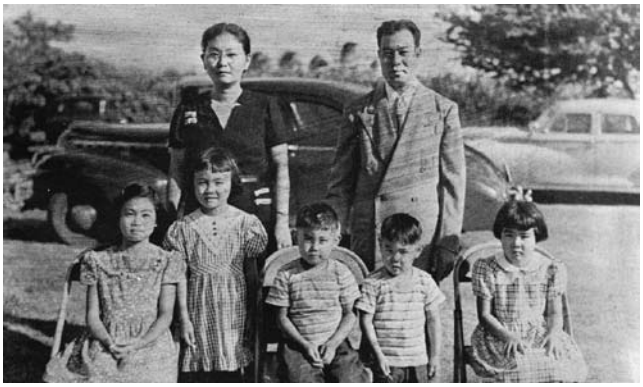
オアフ島のサンディ・カネシロさん一家（字高安系）の仏壇は、沖縄のトートーメーを思わせるものでした。

亀甲墓

カウアイ島カパアのケアリア日本人墓地にある亀甲墓です。

大城強司（きよし）　字上田出身　1世

マウイ島パイヤの「臨済宗ハワイ開教院」で、開教使（住職）をやっていた大城強司氏とその家族です。

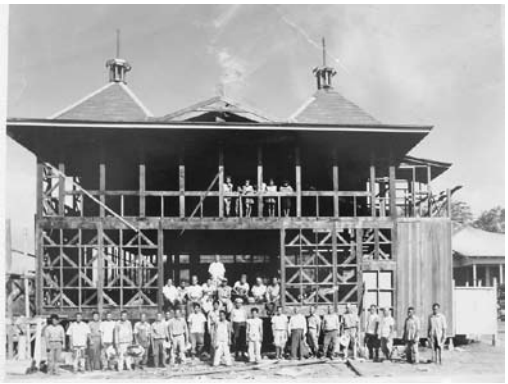


ルース・ユキ・サコダ　字上田系　2世

「父がお寺をやったのは“沖縄人（うちなーんちゅ）を救いあげるため”と聞きました」と話してくれた大城強司氏の娘、ルース・ユキ・サコダさん。

建設中のお寺

大城強司氏と沖縄移民の１世、２世たちは３年がかりでお寺を建立しました。



ピホヌア会館（ハワイ島ピホヌア）

（写真左）ピホヌア会館。ピホヌア組合の集まる場所でした。中には当時の写真などが飾られています。

（写真右）現在も行われている、ピホヌア会館でのカラオケクラブのようす。

３）日系人部隊

1941（昭和16）年12月の真珠湾攻撃に伴い、翌年にはアメリカ西海岸に住んでいた日系人と日本人移民約12万人が財産を没収された上で強制収容所での生活を余儀なくされました。一方、ハワイでは島の人口の約半数を日系人が占めていたため、ハワイの日系社会における指導的立場の人のみが収容されました。

軍隊においては、米国政府は陸軍から日系人兵士のみを戦闘部隊からはずしますが、彼らの努力と頑張りにより、1943（昭和18）年２月にルーズベルト大統領によって、第442連隊と統合、特別に日系兵士のみの部隊が編成されました。

第100歩兵大隊はハワイ出身の兵士を中心に編成された部隊で、通称パイナップル部隊と呼ばれました。志願した多くの若者は、真珠湾攻撃の日系人に対する風当たりの激しさに「我々もアメリカ市民」ということを認めてほしいという気持ちがあったということでした。

ヨーロッパの前線で戦った日系人部隊は多くの勲章を受けた部隊となり、現在でも各地で慰霊祭がおこなわれています。

▲日系人兵士だったヘンリー・H・ヒガはパンチボールに埋葬されました（1968 年）

▲ホノルルにある第 100 歩兵大隊記念館

エディ・K・ヒガ　字真玉橋系　2世

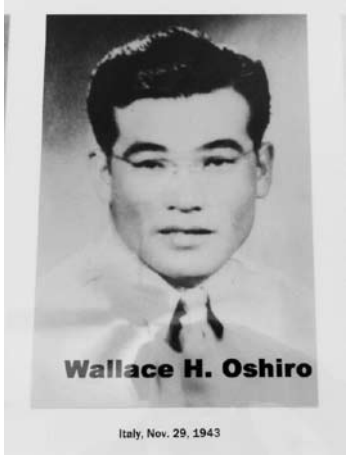
第100歩兵大隊に入隊し、イタリア戦線で死亡したエディ・K・ヒガ（1919-1944年没、享年25才）の葬儀のようす。父は比嘉幸達（こうたつ）氏（字真玉橋出身）です。

エディ・K・ヒガの墓碑

ハワイ島のヒロにあります。

ウォレス・H・オーシロ　字饒波系　2世

第100歩兵大隊に入隊し、イタリア戦線で死亡したウォレス・H・ヒガの肖像（1919-1943年没、享年24才）。父は大城長五郎（ちょうごろう）氏（字饒波出身）です。



ウォレス・H・オーシロの墓碑

オアフ島のパンチボールにあります。

日系部隊特別慰霊プログラムのようす

慰霊祭に参加したヘレン・カワハラさん（字饒波系２世）は、「今でも慰霊祭に参加すると、若者がこんなに死んでしまったのかと思い、悲しくなります」と話してくれました。

トーマス・オーシロ
1926年生　字饒波系　2世（写真左）

オキナワン・フェスティバルでお会いしたオーシロ夫妻。トーマスさんの父・大城長亀（ちょうき）氏（字饒波出身の1世）が市民権を得たのは、トーマスさんが1945年19歳で陸軍に召集された後だったそうです。（写真右は妻のサリーさん）

４）沖縄への救援運動

1945（昭和20）年の沖縄戦の終結後、ハワイの沖縄県人の間では戦災をうけた沖縄の復興のため救援運動がおこり「ハワイ連合沖縄救済会」が組織されました。その中でも1948（昭和23）年に豚550頭を沖縄に送ったことは特に大きな出来事でした。ホノルルのワイアライで養豚場を経営していたカネシロ・カメ、カマト夫妻（字高安出身）も協力をおしまなかったといいます。

また、戦後の豊見城村人会が再結成されたのは「豊見城村救済更生運動」のためでした。当時の「豊見城村人会会議録」には、1948（昭和23）年１月に豊見城村の学童救済のための寄付金で村内の小学校に学用品を送ったことが記されています。

この救済運動は各組織だけでなく、家族、親戚、同郷の者を通じても行われました。字保栄茂出身の當銘亀（とうめかめ）は豊年祭の衣装を仕立てる布を故郷に送っています。そのため字保栄茂では、戦後すぐの豊年祭を元通りの衣装で行うことができたということです。

戦災で何もかも失っていた沖縄では、これらの救済運動によってもたらされた物資の豊富さから、たくさんで豊かなことを「ハワイー」という言葉で表現されるほどでした。

當銘亀（かめ）　字保栄茂出身　1世

當銘亀氏とその家族の写真です。

保栄茂（びーん）の豊年祭衣装

ハワイから送られた、カラフルな布で仕立てられた、字保栄茂の豊年祭の衣装。

マサコ・トメイ　1920年生（写真左）2世

マサコ・トメイさん（當銘亀氏の嫁）は、「大きな箱にカラフルな布をたくさん詰めたことを覚えています」と、字保栄茂に衣装用の布を送ったことを話してくれました。

カネシロ・カメ　字高安出身　1世

サンディ・カネシロさん（字高安系３世）の祖父母、カネシロ・カメ、カマト夫妻が経営していた養豚場。

５）ハワイの沖縄県人会

戦時中に途絶えていた沖縄県人会の活動は、沖縄復興のための救援組織が本格的な活動をはじめる1951（昭和26）年に復活し、ハワイ沖縄県人連合会への結成につながります。組織構成は豊見城村人会などの市町村別の組織や小禄会、泡瀬会などの市町村よりさらに小さい単位での組織も同等に加盟しています。

最初の移民から90年がたった1990（平成２）年は二世、三世が活躍する時代となり、各界で活躍する沖縄系の人々を中心にオアフ島ワイピオに沖縄センターが建設されました。それは県人会活動の新たな拠点であり、沖縄の文化をハワイにいながら学べる多目的な施設となっています。1995（平成７）年には県人連合会の名称が英語のHUOA（Hawaii United Okinawa Association）にかわり、毎年行われるオキナワン・フェスティバルは大きな催しとなっています。それ以外の島では、マウイ島のMaui Okinawa Kenjin Kaiがマウイ沖縄会館を中心に活動を行い、ハワイ島ヒロのHui Okinawa、カウアイ島のHui alu Okinawa Clubが沖縄の文化を若い世代に伝えようとそれぞれ活動を行っています。

▲オキナワン・フェスティバルのオープニング

▲オキナワン・フェスティバルでのボン・ダンス

ハワイ沖縄連合会／HUOA

（写真左）HUOA 専任理事のジェーン・F・セリカクさん。
（写真右）オアフ島ワイピオの丘に建つ沖縄センター。

ヒロ沖縄県人会

（写真左）ヒロ沖縄県人会会長（Hui Okinawa）のマーガレット・トリゴエさん。2010年のハーリー・ボートフェスティバルの事など、沖縄文化を伝える熱意を語ってくれました。

（写真右）琉球琴を教えている赤嶺静子さん。夫である赤嶺セイトク氏（故人）の父は赤嶺亀本（宇金良出身１世）、母はウト（宇長堂出身１世）です。

マウイ沖縄県人会

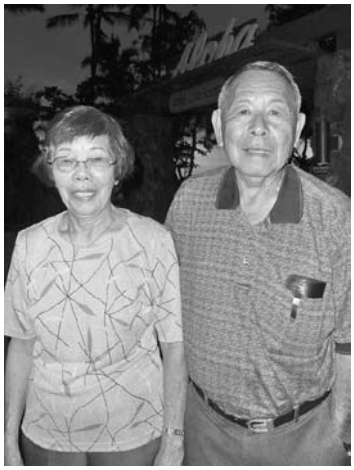
マウイ沖縄県人会はワイルクにある県人会館を中心に活動しています。集会所、ステージなどの設備を備え、沖縄に関する書籍や資料、写真なども展示、保管されています。写真は会館での調査風景です。

カウアイ沖縄県人会

カウアイ沖縄県人会（HUI ALU Club）では、２年ごとにオキナワン・フェスティバルを行っています。写真はカラヘオ公民館でのパーランクーの練習風景です。

ナカソネ夫妻（ハワイ島コナ）

コナには沖縄県人会はありませんが、戦後コーヒー農園に嫁いだ仲宗根シゲ子さんから「当時、沖縄人（うちなーんちゅ）は５世帯で他の日系人とともに組合をつくっていました」と話してくれました。（写真右は夫で２世の武夫さん）



６）系図研究会

ハワイの三世、四世の間では自身のルーツをさかのぼり、家族の歴史を知り、系図を作ることが盛んに行われています。沖縄センターには月１回、約50人の系図研究会会員が集まり、勉強会や情報交換を行い、また各人が系図作りのボランティアを行っています。系図作りはマウイ島でも盛んでした。先祖の戸籍の照会や位牌、門中墓、グスク跡の見学に豊見城市を訪れる人も少なくありません。

◀チョースケ・キシャバさんは琉球新報、沖縄タイムスの関連記事を切り抜き、英訳していました。

◀ナンシー・トメイさんは沖縄県史の移民名簿を英訳し、パソコンで検索できるデータベースを作っていました。

エイミー・エイコ・ツル

1940年生　字饒波系　3世（写真左）

系図研究会会員のエイミー・ツルさんは、自身のルーツを追いながら、他の沖縄人（うちなーんちゅ）の系図作りも手伝っています。右はスミエ・コンシリオさん（字上田系）。

アール・ジツオ・ザーン

1959年生　字饒波系　3世（写真左から2番目）

ザーンさんの祖父母の座安徳長、ウト夫妻（字饒波出身、１世）は、マウイ島のオロワル・キャンプにいました。写真はその跡地で説明してくれるザーンさん。右隣にいるのがフロレンス・シモムラさんとタイ・シモムラさん親子です。

ナガミネ・フォト・スタジオ　マウイ島

大城長五郎氏（字饒波出身１世）の娘・ヘレンと結婚したハロルド・ナガミネはマウイ島のラハイナで写真店を開業（1931年）。現在は娘フロレンス・シモムラさんの息子たちが経営しています。

７）豊見城村人会

ハワイの豊見城村人会は1935（昭和10）年に相互扶助と親睦のため、61家族で結成されました。初代会長には長嶺徳光（字豊見城出身）が就任しています。同時期の役員は副会長が金城繁春（字真玉橋出身）、書記が比嘉宇芝（字嘉数出身）と大嶺登市（字豊見城出身）、会計が比嘉亀助（字真玉橋出身）と長嶺保吉（字饒波出身）でした。

村人会には豊見城青年団があり、当時よく行われていた相撲大会に出場したことや、会員どうしのピクニック、新年祝賀会などが行われていました。戦争中には活動が途絶えますが、沖縄救援運動の中で再結成されます。1955（昭和30）年頃から二世が会を運営するようになり、現在は三世が運営の中心となっています。会員は398人で、今でも「豊見城村人会」が正式名称です。

▲豊見城村（当時）から贈呈された「豊見城村人会」の横断幕

▲孫がデザインした TOMIGUSUKU　Ｔシャツをみせてくれたトーマス・オーシロさん（字饒波系２世）

▲後列左から２番目（男性）が会長のディーン・オーシロさん。今回のハワイ移民調査に集まってくれた豊見城村人会の方々。

長嶺徳光（とくこう）

1882年生　字豊見城出身　1世（後列左端）

1957（昭和32）年、字豊見城の敬老会に豊見城村人会初代会長の長嶺徳光氏も参加しました。そのときの記念写真です。

生年祝い

豊見城村人会主催の生年祝いのようすです。

バレーボール大会

ユニフォームの背中に豊見城市のマークが見えます。

ピクニック

年に一度、アラモアナ・パークで行われています。

８）高良同志会

ハワイには豊見城村人会とは別に、高良（字平良、字高嶺）の出身者家族が集まってできた高良同志会があります。ハワイ沖縄県人連合会には所属していませんが、現在でも100人程度の会員がいます。

◀シャリーン・オーシロさん（３世）の祖父母・カメツ、カメ・オーシロ夫妻は、高良同志会でした。（写真 両端）

９）証言

ハワイでは52人の方から聞き取り調査を行いました。ここでは２人の方の証言を紹介します。

當間（とうま）　長喜（ちょうき）　　２世　1923年生（字保栄茂出身・當間長五郎の息子）／ハワイ島ヒロ在

調査日：2010年９月18日　　場所：當間長喜氏宅
聴　取：赤嶺みゆき、鳥山やよい　通訳：赤嶺静子（Hilo県人会前会長）
協　力：マーガレット・トリゴエ（Hilo県人会会長）
反　訳：崎原奈留子　　文：當銘涼子

當間長喜氏は1923（大正12）年８月13日にハワイ島のオーラにて、字保栄茂出身の當間長五郎、當間カメの三男として生まれる。兄弟姉妹は長男のチョウホウ（故）、次男のチョウコウ（故）、四男のチョウエイ（故）、五男のチョウセイ、六男のチョウモウ（故）、七男のチョウキチ、長女のヨネコ・トウマ・ヤマモトの８人である。長喜氏はハワイ島で東京（江戸）相撲の力士でした。力士の頃の話を中心に聞きました。

家族　　私は1923年８月13日にハワイ島のオーラで生まれました。父・當間長五郎と母・當間カメの２人は豊見城村字保栄茂の出身です。兄弟姉妹は８人で、兄２人、弟４人、妹１人です。その内、五男のチョウセイ（1928年生）、長女のヨネコ（1930年生）、七男のチョウキチ（1933年生）は、現在も元気でアメリカ本国に住んでいます。父は、私が結婚するときにはもう亡くなっていました。小柄な人でした。また、母は野菜作りが上手でした。私達の家は貧しかったので、食べ物はあまりなかったのですが、私は身体が強く、力もあったので何でも出来ましたし、家には畑があったのでなんとか家族が食べられる野菜を作ることが出来ました。

私の家には父の兄弟二人が沖縄から持ってきた位牌があります。私はプランテーションの会社で金やきの仕事（溶接工）をしていました。24才の時、東京相撲（江戸相撲）の力士になりました。それから27才で妻のミツエと結婚しました。私たち夫婦には息子２人に娘が３人います。今は、趣味で中国人の先生に太極拳を10年くらい習っています。また、1990（平成２）年と1999（平成11）年の２回、沖縄へ行きました。その２回とも雨が降って天気が悪かったのを覚えています。残念でした。滞在中は親戚の當間新清の家におよそ１ヶ月間お世話になりました。

オーラ小学校　　父と兄が早くに亡くなり、母１人で沢山の子どもを養うのは困難でした。私は12才でオーラ小学校をやめて家計を助けるために働くことにしました。校長先生に「貧乏な暮らしなので、食べ物を買うのにどうしても働かなくちゃいけない。それで学校をやめます」と話をしました。すると校長先生は「私だけの力で了解する事は出来ないから、上の人に言って許可をもらいなさい」と言われました。その上の人が近くに住んでいたので、その人に了解をもらい学校をやめました。アメリカでは16才までは学校に行かなければならないのです。

ハワイでの暮らし　　買い物をするときは、プランテーションの会社が経営するお店で米やパンなどの食料を買っていました。みんな貧しかったのでノートにツケで買い物をしていました。そして月給がある時にツケた代金を払うのですが、私には母だけだったので返済が苦しかったのを覚えています。食べる物にもとても苦労しました。普段は干しエビを細かく切って大きい鍋に入れて出汁を取ったおつゆと、細かく刻んだキャ

ベツだけのおかずでした。肉や魚はお正月の時にしか食べられません。ちょうどその時、各家庭には畑があったので、そこで野菜を作っていました。また、豚を養っている家も結構ありました。この豚をお正月の時に塩で炊いてみんなで食べました。

太平洋戦争　プランテーションで働いている人は、戦争へは行けませんでした。私は兵隊に志願しましたが、「その男はプランテーションの働き手だから、とるわけにいかない」と帰されました。友達もみな志願で兵隊に行ったので自分もと思い、母は「もう長喜は帰って来ないかも知れない」ということで、女の子やみんなを呼んで私を見送る準備までしてくれていました。でも兵隊にとってもらえませんでした。

東京相撲　私は、家が貧乏だったのでお金を稼ぐため24歳の時（1947年）に、東京相撲（江戸相撲）を始め、それから５年ぐらい続けました。その頃は、野球とかフットボールなども流行っていたのですが、私は東京相撲をやりました。ハワイの有名な力士に、沖識名（おきしきな）というウチナーンチュの相撲取りがいました。ハワイ島のオーラ（現在のケアウ〔Keaau〕）地方には、相撲クラブはなかったのですが、ハワイ島ヒロのイオカラニパークに相撲を取る場所がありました。オーラ地方の力士は私１人でしたが強かったですよ。マウンテンビュー地方やヒロ地方などには力士がたくさんいましたが、ほとんどナイチ（日本本土）の人でした。いろんな地方の力士が集まってハワイ相撲会を作りましたが、沖縄角力はありませんでした。その頃のウチナーンチュは、ヤマトンチュ（日本本土の人）にあまり信用されてなかったので、ウチナーンチュは何も出来なかったのです。

私の四股名（しこな）は長久山（ちょうきゅうざん）と言います。この四股名は日本の相撲会がつけてくれました。私が25歳の時に東京から力道山（りきどうざん）が来て、ヒロ地方で稽古をしてもらいました。力道山は大きな耳の持ち主で身長も180㎝ぐらいありました。若い時はたくさん稽古をしましたよ。自分は強くなりたいと思っていたので、毎日、バーベルを使い、足もしっかり地に着くようにハードなトレーニングを積んでパワーをつけていました。また、技のテクニックもありました。当時は誰もバーベルを使って稽古をしていなかったと思います。私は人に言わずに土俵から相手を出すことだけを思いながら稽古していました。相撲の稽古では、自分よりも体格のいい相手の回しを取って投げ飛ばしていました。私が「どうだ、みたか」というような顔つきで土俵に立っていると、みんな「今のはなんだ」という顔をしてビックリしていました。私はハワイ島のチャンピオンになりました。

ハワイ島のヒロにあるモヘアパークで、各島のチャンピオン達が集まって相撲のトーナメントが行われ、私はその大会でハワイ州のチャンピオンになりました。この成績が評価されて、1948（昭和23）年にオーラ地方やヒロ地方などいろいろな地域の後援会の方々からの寄付金で、東京に化粧回しを注文することになりました。当時の4000ー5000ドルぐらいの値段だったと思います。後援会の方々のおかげで立派な化粧回しをいただくことが出来ました。この化粧回しを貰ったとき、土俵で回しをつけた力士同士で相撲の踊りを踊りました。この化粧回しに描かれている山はハワイのマナケア山です。今でも綺麗に箱に入れて保管しています。

ある時、日本相撲会から「日本で相撲をやりませんか？」というスカウトがありました。私は、日本へ行きたかったのですが、我が家は父がいなく母一人で、自分が家族の稼ぎ手だったし、弟妹もたくさんいるので、みなを残して日本へは行けないと思いあきらめました。でも本当に行きたかったです。ちなみに私以外の兄弟は相撲はやっていません。また、私の母は豊見城村字保栄茂にいる親戚に「長喜はハワイでシマトゥヤードー（相撲とりだよ）、強いよ。だから美人のお嫁さんをもらえた」という連絡をしていたそうです。

ルース・ユキ・サコダ　　２世　1944年生（字上田出身・大城強司（きよし）の娘）／マウイ島在

調査日：2010年９月25日　　場所：マウイ沖縄カルチャーセンター
聴　取：赤嶺みゆき、鳥山やよい　　通訳：アール・ザーン
協　力：ジャネット・チエコ・ヒガ・ミヤヒラ（マウイ沖縄県人会事務局）
反　訳：崎原奈留子　　文：鳥山やよい

ルース･ユキ･サコダさんは1944（昭和19）年１月１日にハワイのマウイ島にて大城強司、大城ヨキコ（宜野座系）の次女として生まれる。兄弟姉妹は５人で、上から長女のマイブリン・ミヨ、次女のルース・ユキ、三女のアリティア・サチ、長男のカオル、次男のウィリアム・ヒトシである。父の大城強司は豊見城村字上田の出身で屋号は三男前新門（サンナンメーミージョー）。マウイ島パイヤの臨済禅ミッション（臨済宗妙心寺派ハワイ開教院花園会）の住職をやっていた人物である。大城強司氏のことやお寺の事などを中心に聞きました。

家族　　私は1944年１月の生まれです。兄弟姉妹５人のうちの次女で、一番上がミヨ（1942年生）、次が私（1944年生）、サチ（1945年生）、カオル（1946年生）、ウィリアム（1947年生）の順です。

父の強司がどうしてハワイに来たのか、どのようにして来たのかはわかりません。父は沖縄で生まれてそのまま沖縄で暮らしていたということです。私が知っているのは、祖父がハワイに来る希望があって、妻とも一緒でなければハワイには行けない、ですが祖母はそのとき父（強司）を妊娠していました。それで別の人と来たという話です。その連れの方と一緒になって６人の子が生まれたそうです。そのときは父（強司）の兄も一緒だったということです。祖父の名前は知りません、会ったこともありません。父は祖父と伯父がハワイに来た後に沖縄で生まれたことになります。

父がハワイに来たのは19才のときでした、祖父の所にいったと思います。父がなぜ祖母を沖縄に残してハワイに来れたのか、わかりません。このことは従兄弟から聞きました。伯父にもあったことはないのですが、その子供たち、従兄弟の一人が沖縄へ行き、豊見城で親戚を捜そうとしたのですが、誰も何も教えてくれなかったそうです。

母のヨキ子はハワイ生まれですが、その親は宜野座村の出身だと聞きました。旧姓はシロタで・・・それ以外は知りません。両親はここハワイで結婚したのです。ですから、父（強司）は１世、母（ヨキ子）は２世。私は２世、３世ということになりますね。

お寺の建立　　父の強司は最初、カウアイ島に渡ったということです、それからマウイ島に来たと。それしか知りません。カウアイ島には祖父がいたのだと思います。いつ頃マウイ島に来たのかは、たぶん臨済のお寺の最初の住職である岡本（南針）先生に呼ばれたのだと思います。父は1938（昭和13）年頃に岡本先生がお寺を離れて後、跡を継ぎ、亡くなる1984（昭和59）年までの約50年、お寺の住職でした。1946（昭和21）年の大津波の後、父を中心に１世、２世の方たちでお金を集めて最初のお寺を建立しました。それまでは家の中でお寺をしてましたが、1946年の大津波はこれまでにない大きなもので、その家を流されてしまいました。その後、建てたお寺はその時の教訓を生かして、高波がきても大丈夫なように床を高くし、階段を上がってから入り口というような造りでした。お寺を造っていた頃、私は小学生だったと思います。みなボランティアでやってました。プランテーションの仕事を毎日やって、土曜、日曜に。父はプウネネだと思いますが、軍の建物を買ったのです。キヘイに行く途中の森林の中のコンクリート２階建ての箱もの、何の建物かはわからないのですが、今もまだ残ってるようです。その建物を解体して材木をパイヤまで「ブンブントラック」

と呼んでいたトラックで運びました。それをお寺を建てる資材にしたのです。

父はお寺のデザインを考えて図面を引いてました。そのお寺も20年前の火事で焼けてしまい、当時のままのものは鐘だけです。今現在建っているお寺が前よりも素晴らしいのですが、父の建てたお寺と似ています。アイディアは一緒です。

父は沖縄に戻ったことはなく、お寺の仕事で日本を訪問したと思います。私は1944年の生まれですから、父が日本に行ったのは1950年代頃、小学生のときだったと思います。お坊さんになるためではなく、もうお坊さんになってましたから、たぶんお寺関係だったと思います。私たちはその頃はもうお寺に住んでました。

私はパイヤスクールとマウイスクールに通いましたが、日本人はたくさんいました。なぜならばプランテーションの時代だったからです。多くの日本人、ポルトガル人、フィリピン人、中国人などの移民がいました。お寺には誰でも来ることができましたが、実際は沖縄の人が多かったのです。最初に沖縄の人がハワイに来たとき、沖縄の人にはいろいろと苦労がありました。言葉のなまりが強いとか、豚を育てているとか、文化の違いからくる差別です。母が日本語で「救い上げる」とよく言っていたことを覚えています。簡潔に言うならば「人と文化、言葉を守るため」と言えると思います。いろいろ苦労してお寺に集まると方言は話せるし、自由にできるでしょう、自分のアイデンティティがオープンになって、安心できると感じる、そういった場所だったと思います。でもそれは沖縄の人だけではなく、全ての人が来て「救い」のため、一緒に力をあわせて・・・・うまく言えませんが何か気持ちはわかります。それが母の言っていた「救いあげる」だったのでしょうか。岡本先生のときのお寺の運営は知りませんが、50年代に父と一緒に１世、２世の方たちはこのようなお寺を建てました。

跡継ぎ　私はお寺からパイヤスクールとマウイスクールに通い、卒業してクイーンズ･ホスピタル･スクールに進みました。看護士になるためです。父は兄弟に対して「お坊さんになれ」とは言いませんでした。父からも母からもです。子供たちには「自由に」ということでした。父は優しかったです、というか子供たちは視線や気配で怒られそうなことはしませんし、言いませんでした。たぶん母が厳しかったので父は優しかったと思います。

お寺の行事　母が父を手伝っていたという記憶はありません。お葬式とかで飲み物を作っていたかな？必要な手伝いは子ども達に頼んでいたようです。何かあるときは会員さんが来ますから、その来る間は私たちが手伝いました。女の子三人でお掃除をやりました、13才頃まではやったと思います。何かの催しものの時に草刈りをしたり、その場所の環境整備、会員さんがお寺を使いたいとき、行く所が必要なときなど。そんなにたくさん集まりがある訳ではなかったのですが、花祭り、お寺の集まり、お盆、大晦日、新年会。お盆は最初の頃はお寺ではなく、沖縄の人たちがそれぞれのキャンプでやってました。それは覚えています。

私たちは小学校に行く前はすべて日本語で生活し、英語が話せませんでした。それで学校に行ってからとても苦労しました。英語をもっと勉強しないといけなかったので、家でも英語を使うようにし、父もブロークンイングリッシュでした。でも父の説法はみな日本語で、英語になったのは父の後を継いだ山口（良三）住職になってからです。メンバーもかわりましたし２世、３世は日本語がわからないし・・親がいくから子もお寺にいくとはかぎりません。夫婦でも宗教が違うというのも珍しくないのですから。

座禅ですか？月曜日には公式に講堂でやってました。でも私は正式なものは知りません、家でやるくらいです。父はもちろんやってましたが、母が座禅をやってるところは見た記憶がありません。

盆ダンスもお寺ができてからはありましたし参加しなければなりませんでした。盆ダンスはもちろん好きです。（アルバムを見ながら）クリスマスパーティもしてますね、クリスマスツリーもあって。写真から父

は大きくみえますが背はそんなに高くはありません、５フィートぐらいでした。

マウイ琉球カルチャーグループ　　私たちは三線も習っていますよ。臨済禅ミッションに月１回、オアフ島からノーマン・カネシロ先生が三線を、エリック・ワダ先生が踊りと笛を教えにきてくれます。お盆のときの民謡、エイサーをやります。久高まんじゅ主、テンヨー節、通い船、安里屋ユンタ、沖縄育ち、うるま島、三村節、イチュビ小、汗水節など。盆ダンスのとき、ステージで三線やって、女性は着物、男性はハッピで踊ります。それと獅子舞もやります。ワダ先生が教えてくれて、獅子も手造りです。マウイ琉球カルチャーグループには臨済宗ではなくても誰でも参加できます、ローカルの方もいますよ。

具志徳助氏のこと　　1978年10月21日にこの臨済禅ミッションは､京都の妙心寺の花園会になりました。（写真をみて）この結成式には日本、ハワイ、大阪、京都から300人が大きなバス６台で来てくれました。写真の大勢のお坊さんもそうです。この写真の端に写ってるのが具志徳助さんです。

具志さんのことはよく覚えてます。豊見城の出身だったのですね、もう亡くなりましたが、歌がとても上手でした。面白いときや楽しいときすぐに立ち上がって、心に感じたそのときそのときの事を即興で歌って表現するのです。そういう方でした。

▲ 1978（昭和 53）年に結成された妙心寺派ハワイ開教院
花園会の記念写真。２列目左端が具志徳助氏（豊見城村出身１世）

調査協力者・機関

南米（ブラジル、ボリビア）

協力者　大嶺快清、大嶺キヨ、大嶺キヨ子、金城フミ子、金城・ジョン・まさひろ、瀬長貞子、城間愛子、赤嶺フロリンダ、赤嶺千代子、赤嶺イレーネ、赤嶺マウロ、赤嶺啓、城間セルジュ、大嶺勉、當銘清光、高良春子、赤嶺ノエミア、大田徳助、大田徳雄、大田ハツエ、大田真孝、大田ケイコ、岡田・大田・セシリア、小波津喜久枝、瀬長好子、末永・上原・美枝子、大城孝三、大城ミユキ、新垣・アメリア・よしこ、美代子・宜保・山田、山田みつのり、久保田喜美子、赤嶺尚由、赤嶺礎乃子、赤嶺・日郷･ワシントン、赤嶺フィリッペ、外間ウト、外間ハツ、大田春子、大城ソネコ、金城文子、宜保ヨネコ、大田賀仁、大城よしお、金城・ジョゼ・幸憲、上原・外間・君子、金城ジュリオ、仲里マリオ、福地俊之、福地ツルコ、ジェイミ・コウハン･金城、島袋･金城･ミエコ、金城スエコ、大城勇雄、金城･幸吉･ジェイミ、勝連ひろし、大城キヨタカ、ツネオシンザト、大城よしみつ、平良玉茂、福地つとむ、石原昌順、佐々木剛二、島田ふさよし、与那嶺真次、長嶺清子、与儀昭雄、玉城ユキモリ、知念直義、大田ヤスコ、Sechu Oshiro、金城ただし、須藤英二、崎浜秀彦、仲里・真常・アセリーノ、仲里・勝連・シモネ、玉城・ジョルゼ・諚二、玉城みちよ、テレーザ・友寄・金城、島袋・ネルソン・キヨハル、仲村渠信子、金城ヤス子、比嘉永吉、比嘉次雄、比嘉順子、具志堅興貞、宮城和男、ディオニシオ・コンドリ・ママニ、安里幸子、比嘉智、仲村渠勝三、比嘉永祥、与那城昭広

協力機関　Maximiliano B.F.S.Moraes、オキナワ日本ボリビア協会、ボリビア沖縄県人会、コロニア･オキナワ村役場、オキナワ第１日ボ学校、ブラジル豊見城市民会、ブラジル沖縄県人会、カンポ・グランデ市沖縄県人会、サントス沖縄県人会、安慶名農園、ソールナッセンテ人材銀行、野村流音楽協会ブラジル支部、SUB WAY、カンポ・グランデ日伯文化体育協会、SOBA’CHOPP’S&CIA、HONG KONG

ハワイ

協力者

オアフ島／リンダ･山城、ナナセ･上原、トキコ･バゼル、リネット･照屋、ジョイス･知念、エイミー･ツル、ロバート・ツル、ヨシコ・ナガミネ、ジェーン・セリカク、バーニー・ミヤシロ、グシケン、アケミ・カネホ、サンディ・カネシロ、トーマス・オオシロ、サリー・オオシロ、キース・オオシロ、マサコ･トメイ、ミノル･カネシロ、タツノ･カネシロ、キミエ･ホカマ、シンドウ･ニシヤマ、アン･ユーキ、カツエ・アカミネ、ドロシー・ワニヤ、ケイ・トウマ、ショウゾウ・ナガミネ夫妻、ジーン・トウメ、ジュリエット・ジャカヒ、ディーン・オオシロ、ビル・グシ、シルビア・グシ、スティーブン・グシ、アリス・サイトウ、カズコ・オオシロ、シャリーン・オオシロ、セリーナ・ヒガ、グラディス・ヒガ、チョウスケ・キシャバ、ナンシー・トメイ、シゲノブ・ナカマツ、ジーン・フジタ、エイミー・サキハマ、ロバート・アラカキ、ゴロウ・スミダ

ハワイ島／シゲコ・ナカソネ、タケオ・ナカソネ、ジョージ・タマシロ、ショウジ・マツモト、村田誠己、ミツエ・タニヤマ、マーガレット・トリゴエ、エドガー・トリゴエ、エミ・モイヤー、ケン・モイヤー、タカシ・トウマ、ジェーン・マツダ、エブリン・ヒガ、ハルオ・マエカワ、ヨネ・マエカワ、チョウセイ・マエカワ、ハルミ・マエカワ、シズ・アカミネ、チョウキ・トウマ夫妻、ヘンリー・シマブクロ、ショウコウ・ナガミネ夫妻、ヨシオ・トウマ

マウイ島／コンラード･ホカマ、アルベン･ナミヒラ、コウキ･タマシロ、ヘレン･タマシロ、ジャネッ

ト・ミヤヒラ、エレイン・フジタ、ジョージ・フジタ、シェリー・タマヨセ、ヘレン・カワハラ、フランク・カワハラ、フローレンス・シモムラ一家、スエコ・ナカザ、ケン・ノダ、ミチコ・タレント、リン・ヤマカワ、フレード・タマサカ、ユミ・タケダツ、テンガン、山口良三、ゲンワ・ホカマ、ケンジ・オオヤマ、リキオ・エンドウ、タイ・シモムラ、アール・ザーン親子、マリコ・ニシヤマ、ルース・サコダ、ヤスオ・ナガミネ、クリア・ナガミネ、アサコ・イゲ、ジョアン・クニシゲ、エドワード・タマヨセ、サエコ・タマヨセ、ジョー・トウマ、パトリシア・カツンガル
カウアイ島／マモル・カネシロ一家、トグチ、ベイアン・ナガミネ、スタンレー・サコダ、ノボル・ムラオカ、ジュディ・ムラオカ、ノーマン、ポール・ヤマウチ、ユタカ・アラカキ、ビギー・アラカキ、モモハラ夫妻、コウスケ・ミヤシロ、ギャリー・ウエウンテン親子、センスケ・ウエウンテン夫妻、トシコ・カネシロ、ユキ・ソケイ、タバ・ガソリンスタンド、イシハラ・マーケット

協力機関　ハワイ大学ハミルトン図書館、ハワイ大学沖縄研究センター、ハワイ沖縄センター（HUOA）、豊見城村人会、プランテーション・ビレッジ、日本文化センター、100 大隊記念館、内田コーヒー園、ヒロ沖縄県人会（Hui Okinawa）、ピホヌア会館、ツナミ博物館、マウイ沖縄県人会、ナガミネ・フォト・スタジオ、カウアイ沖縄県人会（HUI ALU Club）、カネシロ・ファーム

＊順不同、敬称略

むすびに

市史だより第10号、第11号と移民の現地調査報告集を発行しましたが、移民調査は豊見城市の移民の歴史の刊行を目的として進めてきました。調査をこころよく引き受けてくれた話者の方々、資料を提供してくれた方々、調査へ便宜を図ってくれた方々、そして協力していただいた機関に厚くお礼を申し上げます。

調査に行く先々で、郷里の豊見城市が移民調査にきてくれたと歓迎を受け、どんな「本」ができるのか楽しみだと期待と希望を託されました。

現地調査や市内（市外）調査で得られた資料を基に移民編を刊行しますが、ブラジル、ボリビア、ハワイ、八重山の他にペルー、フィリピン、南洋群島、台湾、満州、日本本土を取り上げる予定です。各国、地域別に豊見城市の移民の歴史がまとめられればと考えています。

この市史だより11号を編集中に、2010年９月ハワイのマウイ島で聞き取り調査に応じてくれた、ルース・ユキ・サコダさんが2011年７月24日、67歳でお亡くなりになったとの知らせをうけました。ルースさんの証言は、この11号に収録しました。ご冥福をお祈りいたします。

（市史編集事務局）

参考文献

『ブラジル沖縄県人移民史』ブラジル沖縄県人会／ 2000年
『カンポグランデ日系コロニアの歩み』カンポグランデ日伯体育文化協会／ 2003年
『ボリビア・コロニア沖縄　入植二十五周年誌』ボリビアコロニア沖縄入植二十五周年祭典委員会／ 2005年
『希望の大地　ボリビアに期待と夢を』沖縄ボリビア協会／ 2004年
『コロニア・オキナワ入植50周年記念誌　ボリビアの大地に生きる沖縄移民』オキナワ日本ボリビア協会／ 2005年
『来布五十年記念沖縄県人写真帳』比嘉武信（編）／ 1951年
『新聞にみるハワイの沖縄県人90年　戦後編』比嘉武信（編著）／ 1994年
『TO　OUR　ISSEI ……おかげさまで』ハワイ沖縄連合会／ 2000年
『EVERY GRAIN OF RICE』Rita Goldman（著）
『金武町史第一巻　移民・本編』金武町史編さん委員会／ 1996年
『具志川市史第四巻移民・出稼ぎ論考編』具志川市史編さん委員会／平成14年（2002年）
『名護市史本編・５　出稼ぎと移民Ⅱ　出稼ぎ＝移民先編（上)』名護市史編さん委員会／ 2008年

参考資料

「豊見城村人會會議禄　創立昭和十年貳月弐四日」豊見城村人会／昭和11年11月～ 1974年12月６日
「豊見城村人會會則　創立昭和十年貳月弐四日」豊見城村人会

写真（提供者、引用、撮影）

提供　Ｐ７・・・「赤嶺新野栄」城間愛子氏
　　P45・・・「花嫁になった娘を送る長嶺亀助」ミツエ・タニヤマ氏
　　P47・・・「建設中のお寺」ルース・ユキ・サコダ氏
　　P48・・・「ヘンリー・Ｈ・ヒガの葬儀」セリーナ・ヒガ氏
　　P54・・・「長嶺徳光・敬老会にて」上原美佐子氏
　　P54・・・「豊見城村人会寄付の横断幕」セリーナ・ヒガ氏
　　P55・・・「生年祝い」「バレーボール大会」セリーナ・ヒガ氏
　　P55・・・「カメツ・オオシロ一家」シャリーン・オオシロ氏

引用　P43・・・「長嶺龜の家族」『来布五十年記念沖縄県人写真帳』
　　P45・・・「當間加那」、「當間加那一家のタロ畑」『来布五十年記念沖縄県人写真帳』
　　P47・・・「大城強司の家族」『来布五十年記念沖縄県人写真帳』
　　P49・・・「日系兵士　エディ・K・ヒガの葬儀」『来布五十年記念沖縄県人写真帳』
　　P50・・・「カネシロ・カメの養豚場」『TO　OUR　ISSEI ……おかげさまで』
　　P50・・・「當銘亀の家族」『来布五十年記念沖縄県人写真帳』

上記以外、文化課撮影
　　Ｐ４～８／ 2008年ブラジル調査　P32 ～ 34 ／ 2008年ボリビア調査　P42 ～ 54 ／ 2010年ハワイ調査
　　P50・・・「保栄茂の豊年祭衣装」2006年文化課

調査者

南　米　　町田　宗博（市史移民編専門部会長）
　　赤嶺みゆき（市史移民編事務局）

ハワイ　　赤嶺みゆき（市史移民編事務局）
　　鳥山やよい（　　〃　　）

執　筆

赤嶺みゆき、鳥山やよい
比嘉　香織、當銘　涼子

聞き取り調査の反訳（英語、スペイン語）

崎原奈留子

豊見城市史だより　第11号

2012（平成24）年３月31日
編集・発行
豊見城市教育委員会生涯学習部文化課
〒901－0232　豊見城市字伊良波392番地
電 話（098）856－3671
ＦＡＸ（098）856－1215
印刷　第一印刷株式会社

豊見城市文化課スタッフ

生涯学習部長兼文化課長	上原　　壽
文化課長	宜保　　馨
文化係長	与那嶺　豊
主　　事	名嘉　拓哉
市史嘱託職員	鳥山やよい
	比嘉　香織
	當銘　涼子
	崎原奈留子
文化財嘱託職員	大城　愛梨
臨時職員	大城　夏子